魚津市埋蔵文化財調査報告第９集

富山県魚津市

早月上野遺跡

（はやつきうわの）

― 北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ ―

１９８２

魚津市教育委員会

序

本書はこのたび北陸自動車道滑川―朝日間の建設に伴い、工事法線内にかかる魚津市早月上野遺跡について、日本道路公団の依頼により、魚津市教育委員会が調査主体者となり、昭和54年６月から昭和55年８月まで発掘調査を実施したその報告書である。

早月上野遺跡は当市の遺跡の中でも最も古くからその存在が知られており、面積も県内最大級との折紙がつけられている。今回の調査によって新しい事実が確認され、また学術的成果を得ることができた。本書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深めるものとなり、学問研究に少しでも役立つならば幸である。

発掘調査の実施にあたっては富山県教育委員会からご指導を賜り、日本道路公団新潟建設局・同魚津工事事務所をはじめとし、黒部市教育委員会・富山県埋蔵文化財センター、調査にあたられた関係各位、地元の方々からご理解とご協力を賜ったことに対し、深甚なる謝意を表する次第である。

昭和57年３月

魚津市教育委員会

例　言

1．本書は北陸自動車道滑川―朝日間の建設に伴って破壊される富山県魚津市早月上野遺跡につき、日本道路公団から魚津市教育委員会が委嘱を受け、昭和54年6月20日から昭和55年8月12日まで発掘調査を実施したその報告である。

2．発掘調査の担当者は次のとおりである。

昭和54年度	魚津市教育委員会社会教育課	麻柄一志
昭和55年度	魚津市教育委員会社会教育課	斎藤　隆
	同	麻柄一志
	同	安念幹倫
		（現小矢部市教育委員会）
	黒部市教育委員会社会教育課	桜井隆夫
	東北大学研究生	松島吉信
		（現富山県埋蔵文化財センター）

3．遺物の整理作業は主として、斎藤、麻柄、安念の3名があたった。

4．本書の執筆は各調査員との共同討議検討の上、分担執筆をしたもので、目次に執筆者の氏名を明記した。

5．遺物の実測・写真撮影・図版の作成は、関係する各項の執筆担当者が主としてあたり、河西由美子・松島里美の協力を得た。

6．出土遺物等は魚津市立歴史民俗資料館にて保管している。

目　次

序

例　言

Ⅰ　位置と環境……（麻柄一志）1

Ⅱ　調査の経過と概要

1　調査経過……（斎藤　隆）4
2　調査の概要……（麻柄一志）4
3　過去の調査……（　〃　）6

Ⅲ　層序と遺構……（　〃　）

1　層序……7
2　遺構……7

Ⅳ　遺物

1　石器……（麻柄一志）12
2　土器……（斎藤　隆）34
3　その他の遺物……（　〃　）36

Ⅴ　まとめ……（麻柄一志）37

Ⅰ　位置と環境

北側を日本海に面し、その他の三方を日本アルプスとそれに続く山岳地帯に囲まれた富山平野は古来よりその地理的条件の下に独自の文化を形成している。この富山平野のほぼ中央部に南の山岳地帯から北に向って延びる狭長な丘陵がある。呉羽丘陵と呼ばれるこの丘陵は富山平野を二分するように突出しており、これを境に西部を呉西、東部を呉東と呼び習わしている。呉東と呉西は単に地理的な違いに止まらず、文化面での差も大きいといわれている。

魚津市は呉東の中でもさらに東部に位置し、もとは新潟県と境を接する下新川郡に属していた。洪積台地が発達しており平野部が狭まく、また大小河川によって河岸段丘が形成されており、起伏ある地形が広がっている。この地理的環境の制約と恩恵によって遺跡の発達に片寄りがみられる。

○旧石器時代

魚津市内で判明している旧石器時代の遺跡は今のところ早月上野遺跡のみである。隣接する滑川市・黒部市でもそれぞれ１遺跡で旧石器時代の遺物が出土しているにすぎない。旧石器時代の遺跡の数はその地域の研究者の有無によっても大きく影響を受けるが、100を大きく越える県西部地域と比較すれば、その過疎性は実情に近いものと思われる。

早月上野遺跡では富山県教育委員会の発掘調査で、３つのユニットが検出され、ナイフ形石器の終末期と考えられるナイフ形石器、掻器等が出土している。

○縄文時代

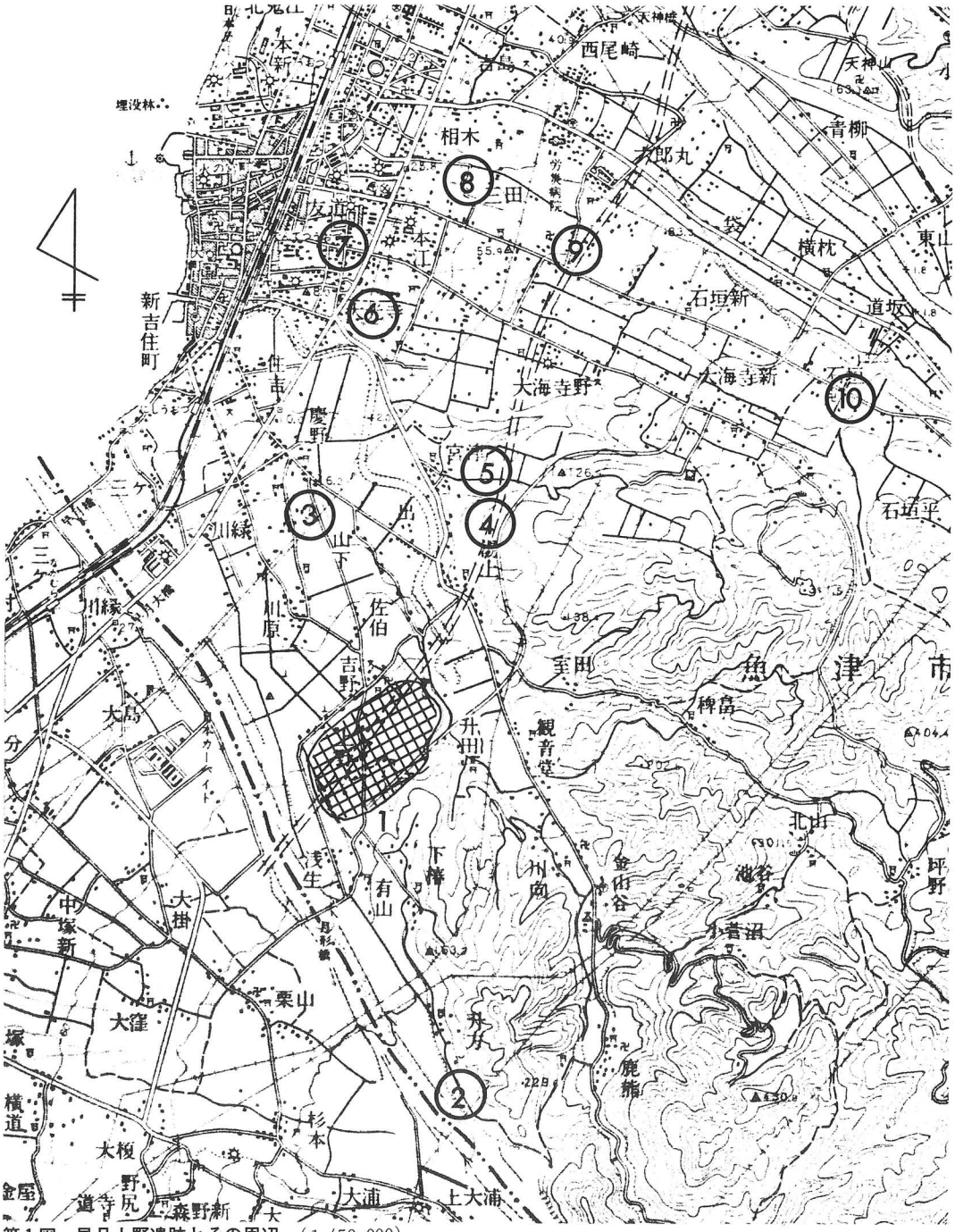
縄文時代の遺跡の発見は古く、記録に残されているものでも明治年間に既に早月上野遺跡が注目されていた（下新川郡史稿)。その後故早川荘作氏らによって多くの遺跡が踏査され、魚津市内では早月上野遺跡、天神山遺跡、黒沢遺跡、桜峠遺跡、石垣遺跡等から土器・石器の出土が知られていた。

早期では押形文土器が富山県下では初めて桜峠遺跡から出土している。また近年の調査で佐伯遺跡からも押文土器が発見されている。

前期の遺跡は市内では最も少く、わずかに佐伯遺跡、山下遺跡から前期末の福浦上層式土器が出土している。

中期は当地の縄文文化の花開いた時代であり、特に天神山遺跡、早月上野遺跡、宮津遺跡、桜峠遺跡、大光寺遺跡、石垣遺跡といった大遺跡が点々と出現し、その間に小遺跡が数多く分布する。中期の天神山式の標式遺跡となっている天神山遺跡をはじめ、ほとんどが中期前葉の新崎式から遺跡が形成され、串田新式の時には衰退しはじめる。中期の遺跡からは莫大な量の打製石斧が出土することが大きな特徴となっている。

後期の遺物は早月上野遺跡、黒沢遺跡、石垣遺跡、東尾崎遺跡から出土しており、晩期では中山遺跡、石垣遺跡、印田遺跡、早月上野遺跡から出土している。中期に比べて、後晩期は遺跡数



第1図　早月上野遺跡とその周辺　(1/50,000)

1．早月上野遺跡　2．升方遺跡　3．佐伯遺跡　4．湯上遺跡　5．宮津遺跡　6．大光寺遺跡　7．友道遺跡　8．本江遺跡　9．印田遺跡　10．石垣遺跡

も遺物量も極度に減少している。

○弥生時代

弥生土器は、中期の土器が佐伯遺跡、湯上B遺跡で少量出土している。後期末から古墳時代初頭の土器は、量的にも出土遺跡数も爆発的に増加する。この時期は、上記の2遺跡のほか、早月上野遺跡、天神山城遺跡、友道遺跡などが出現する。この後、古墳時代は遺跡数は極端に少なくなり、再び遺跡が増加するのは奈良・平安時代になる。

早月上野遺跡は魚津市西端の早月川と角川に挟まれた上中島台地の最深部に位置する。台地の両側は早月川と角川によって深く刻まれ、約30m の段丘崖がみられる。

遺跡の範囲は標高約65m ～75m の台地のほぼ全域で、長さ約1㎞幅約500m である。遺跡の中心部は上野地区の村社付近で、ほぼ平坦地が広がっている。中心部からややはずれた標高約70m あたりからゆるやかな傾斜がみられる。今回の調査はちょうどこの地点である。遺物の散布状況は中心部では表面採集でかなりの量の土器・石器を採集できるが、今回の調査地である斜面部では地表面に遺物の散布はほとんどみられない。

魚津市内は沖積地が少なく水田に適している土地があまりないといえる。このため近世以後の洪積台地の水田開発は盛んで、早月上野遺跡の位置する上中島台地も大部分が水田と化している。また1970年代にさかんにおこなわれた圃場整備の波は洪積台地上の水田も例外とせず、早月上野遺跡の範囲内の吉野地区が大規模な圃場整備がおこなわれている。団体圃場整備事業はおこなわれていないが、上野地区でも個人規模での圃場整備はおこなわれており、遺跡は近世の開田と1970年代の圃場整備による2度の破壊がおこなわれたことになる。調査地区ではこうした過去の遺跡の破壊が明瞭に認められた。

なお、遺跡付近は富山県内を縦断する交通幹線が密集しており、北陸自動車道のほかに、既にスーパー農道が建設されており、採来は北陸新幹線のルートにも予定されている。今後の遺跡保護対策が望まれる。

Ⅱ　調査の経過と概要

1．調査経過

北陸自動車道、富山市一朝日町間の計画路線が昭和48年３月に発表され、建設予定地内分布調査事業が同48年11～12月、49年３月と二期にわたり県文化課、大学生等の参加により実施された。調査方法等は踏査を原則としており、遺跡地の範囲確定を目的とする試掘調査はおこなわず、あくまで、遺物の散布状況による推定範囲である。当市に於いて確認された遺跡は第１図に示す。特に早月上野、吉野、印田遺跡等は「…段丘上に立地し遺存状態もかなり良好と判断される遺跡で県下でも有数の遺跡と推定…」と報告されている（富山県教委1974）。尚この調査に関しては参加者側学生の素直な感想も報告されている（久々1973）。昭和50～同53年については富山～滑川間の早期開通をめざす為、当市関内はほとんど空白の状態であった。同54年４月に麻柄が市教委へ埋文専門主事として勤務し、市独自の体制準備がなされるようになった。日本道路公団事業契約は、吉野、早月上野、蛇田、宮津遺跡であり、秋には県埋文センターの応援をえて印田遺跡の試掘を計画した。しかしながら調査員１名の為と、試掘面積が膨大な為、思うように試掘調査は進行しなかった（公団側の用地買収の遅れ、県埋文センターの応援等が実現しなかった）〖５頁上参照〗。同55年１月に文化課、埋文センター、公団等で55年度事業日程が協議され、湯上、宮津遺跡は埋文センターで、早月上野、印田、天神野新は魚津市教委でと決定された。同55年４月に県教委より安念、斉藤が市教委へ派遣され、黒部市教委桜井の応援をえて計４名の調査体制を組んだ。調査は早月上野遺跡の試掘と記録保存作業を４月末～８月中旬、印田遺跡は８月中旬～12月上旬、試掘調査及び一部記録保存調査を実施した。用地末買収等の問題が残っており、当初の計画予定より作業が進展しなかった、その為、56年度に印田遺跡の試掘、及び記録保存調査、天神野新遺跡の試掘が残る結果となった。同年12月に、市教委―公団、市教委―文化課と協議し、３名体制で用地買収等が終了していれば（その他遺構とかなければ）印田、天神野新は56年８月までに終了と市教委が報告した（発掘順序は印田から天神野新へ）56年３月、公団の要望により、天神野新よりの調査要望があり、検討の結果これを受けいれることになった。調査は４月20日～５月30日まで実施され、天神野新１は試掘のみ、同２は試掘及び一部記録保存をした。同56年６月より印田遺跡の試掘を実施し、７月には安念が小矢部市教委へ派遣となり体制は２名に縮小され仕事のみが残る結果となった。一部の記録保存調査が８月中旬に終了したがまだ未買収地がある為調査は中断された。調査が再開されたのは師走の中旬ごろであり、作業員の確保も思うようにいかず、調査員と機械のみの日もあり、一時は雪等も降り、調査等もあやぶまれたが、社会教育課員の協力もあり、執務納め直前で調査が完了した。

2．調査の概要

早月上野遺跡は昭和54年度・55年度の２ヶ年にわたって発掘調査を実施した。以下その工程を

記す。

昭和54年６月20日～７月21日　吉野地区試掘

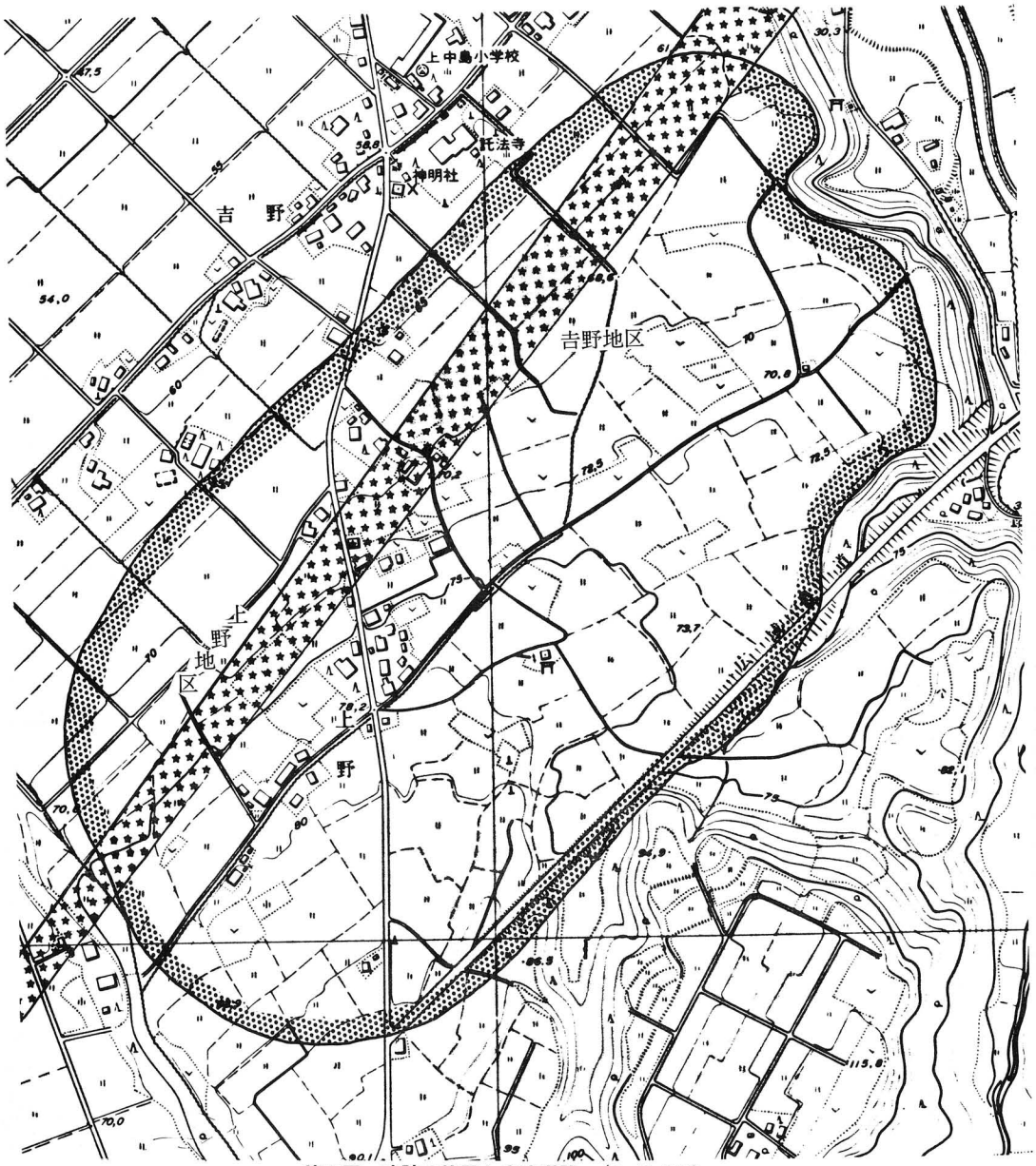
昭和54年７月30日～８月20日　吉野地区記録保存

昭和54年８月25日～10月20日　吉野地区試掘

昭和54年10月22日～12月10日　上野地区試掘

昭和55年４月28日～５月31日　上野地区試掘

昭和55年６月１日～８月12日　上野地区記録保存



第２図　遺跡の範囲と高速道路　(1/7,500)

このように調査は小間切れに進行し、１年を越える期間を費した。これは道路用地の買収が遅々として進まず、買収の終了した区角を点々と発掘していたためである。

54年度は比較的買収の進んでいた吉野地区より試掘にかかり、一旦７月下旬に終了した。これは用地買収が発掘の進行ペースについていけなかったためである。この段階で試掘の終った地点で記録保存の必要な約800㎡の記録保存をおこなうことになった。吉野地区は台地のほぼ全面に遺物の散布がみられる。しかし1970年代に圃場整備がおこなわれているため、遺物包含層の良好に残存している地点は少なく、記録保存の対象面積はわずかであった。記録保存をおこなった地区からは遺構の検出はなく、遺物も縄文土器と越中瀬戸・寛永通宝が同一層内の同一レベルで出土するといった状態で、しかもかなり細片化している。しかし、遺物量は多く最大限集収に努めた。なお８月以後の試掘実施区からはわずかに表土層から数点の遺物の出土をみただけで、記録保存はおこなわなかった。

上野地区の試掘も用地買収に悩まされ、買収が終了した水田１枚ごとの調査となった。12月の初旬に調査のできる買収済用地がなくなったため、以下は次年度に持越すこととなった。

55年度はまず試掘を完了させることに主眼をおき、４・５月で試掘調査を完了させた。54年度の試掘調査の結果、記録保存の必要な地点は３ヶ所認められた。55年度の試掘区では、遺物が特に多く出土する地点はみとめられなかった。

記録保存の実施区は南からＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区と名づけた。いずれも遺物量は豊富であったが、遺構が確認されたのはＡ地区のみである。

３．過去の調査について

早月上野遺跡は明治35年の道路工事の際発見された遺跡である。その後多くの研究者・好事家が訪れ、遺物の採集に努めた。地元の上中島小学校には大正年間に出土した土器・石器が保管されていた（現在は魚津市立歴史民俗資料館にて保管）。

戦後は発掘ブームが訪れ、魚津市内でも富山考古学会等によって天神山遺跡・桜峠遺跡の発掘調査がおこなわれた。こうした刺激もあり、早月上野遺跡も地元中学の歴史クラブ員などによって幾度も発掘調査がおこなわれている。こうした調査によって、この遺跡は縄文時代中期から晩期の遺物が出土することが確認され、遺跡の範囲も５～６万㎡を越えることがわかった。

昭和49・50年の２ヶ年にわたって、スーパー農道の建設に先立つ緊急調査がおこなわれた。この調査は遺跡南端部の発掘であったが、従来知られていた縄文時代だけでなく、旧石器時代、平安時代、室町時代の遺物・遺構も検出されている。遺構の確認はこの時の調査が初めてである。旧石器は赤土（ローム層）から出土しており、ナイフ形石器、掻器をもつユニット、配石がみつかっている。

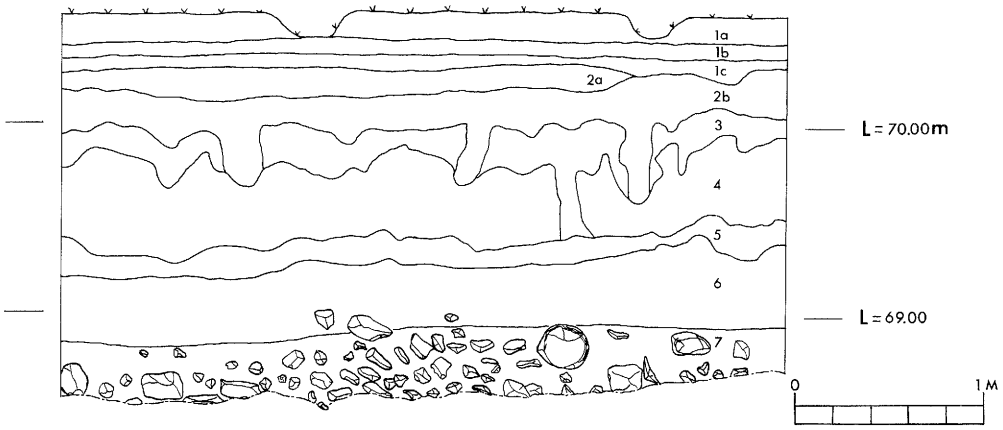
平安時代では竪穴住居跡が確認され、土錘・須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・磁器が出土している。室町時代では掘立柱建物８棟と井戸・土坑が確認されており、古瀬戸・珠洲焼・一石咒符が出土している。

Ⅲ　層序と遺構

1．遺構

遺跡は早月川と角川に挟まれた上中島台地の最深部にあたり、両河川の河岸段丘上に位置する。地形はほぼ平坦であるが南から北へ緩やかに傾斜している。発掘地点の標高は65～75m であり、圃場整備実施地区を除くと、層序はほぼ同一である。

図示した土層図は拡張区Ｂ地区の北側の深掘区である。



第３図　基本層序

１ａ層……耕作土＝暗褐色土	１ｂ層……暗褐色土（やや暗）
１ｃ層……暗黄褐色粘質土＝床土	２ａ層……黒褐色土
２ｂ層……黒褐色土（やや黄）	３　層……灰褐色土＝漸移層
４　層……黄褐色粘質土＝ローム層	５　層……淡黄褐色粘質土＝ローム層
６　層……赤褐色粘質土＝ローム層	７　層……礫層

遺物の包含層は１ａ層から２ｂ層までで、１ａ～１ｃ層出土遺物はかなり磨滅・細片化している。１ａ～１ｃ層からは、縄文土器・古銭・越中瀬戸が出土している。２ａ・２ｂ層からは縄文土器・石器が中心に出土しているが、この層から出土の遺物も破片ばかりで、越中瀬戸も少量出土している。いずれも良好な包含層とはいえない。

2．遺構

今回の調査で検出された遺構はすべてＡ地区からである。土坑14基、特殊遺構13基である。土坑の中で時期が判明しているのは唯一遺物の出土したSK01だけである。特殊遺構は、一般に風倒木痕、ドーナツピットと呼ばれているものであり、人為的なものではないと考えられる。なお、特殊遺構からは遺物の出土はない。

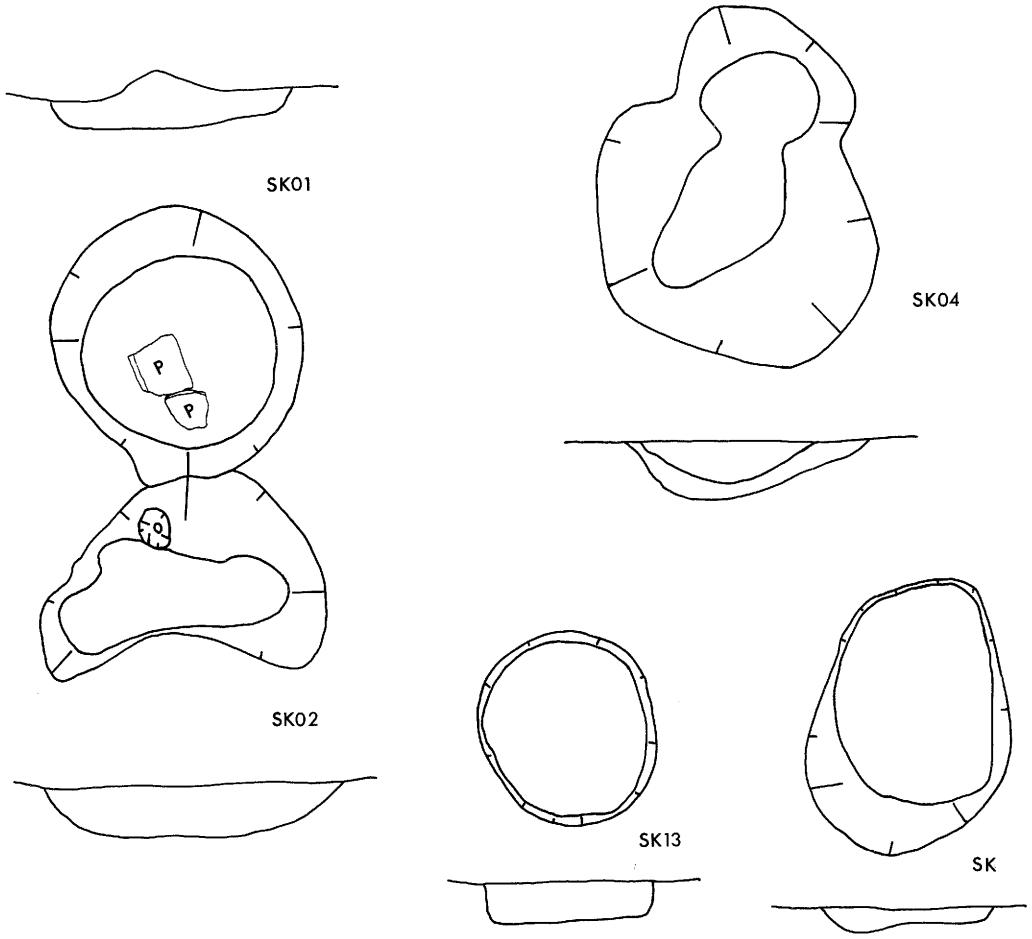
SK01は54年度の試掘の際、プランが確認されていた。試掘の際遺構上面から粗製の甕形土器が

出土しており、55年度の調査では遺構内から朱塗りの精製浅鉢形土器が出土している。遺構は現存部で径約95cm、深さ約25cmを測る。SK01が検出された地点は水田の開発などで地形が改変されており、試掘の際も表土層の直下に遺構面が存在している。遺構の上部は既に失われているものと思われる。SK01出土の土器は２点とも縄文時代晩期後葉の下野式に属する。

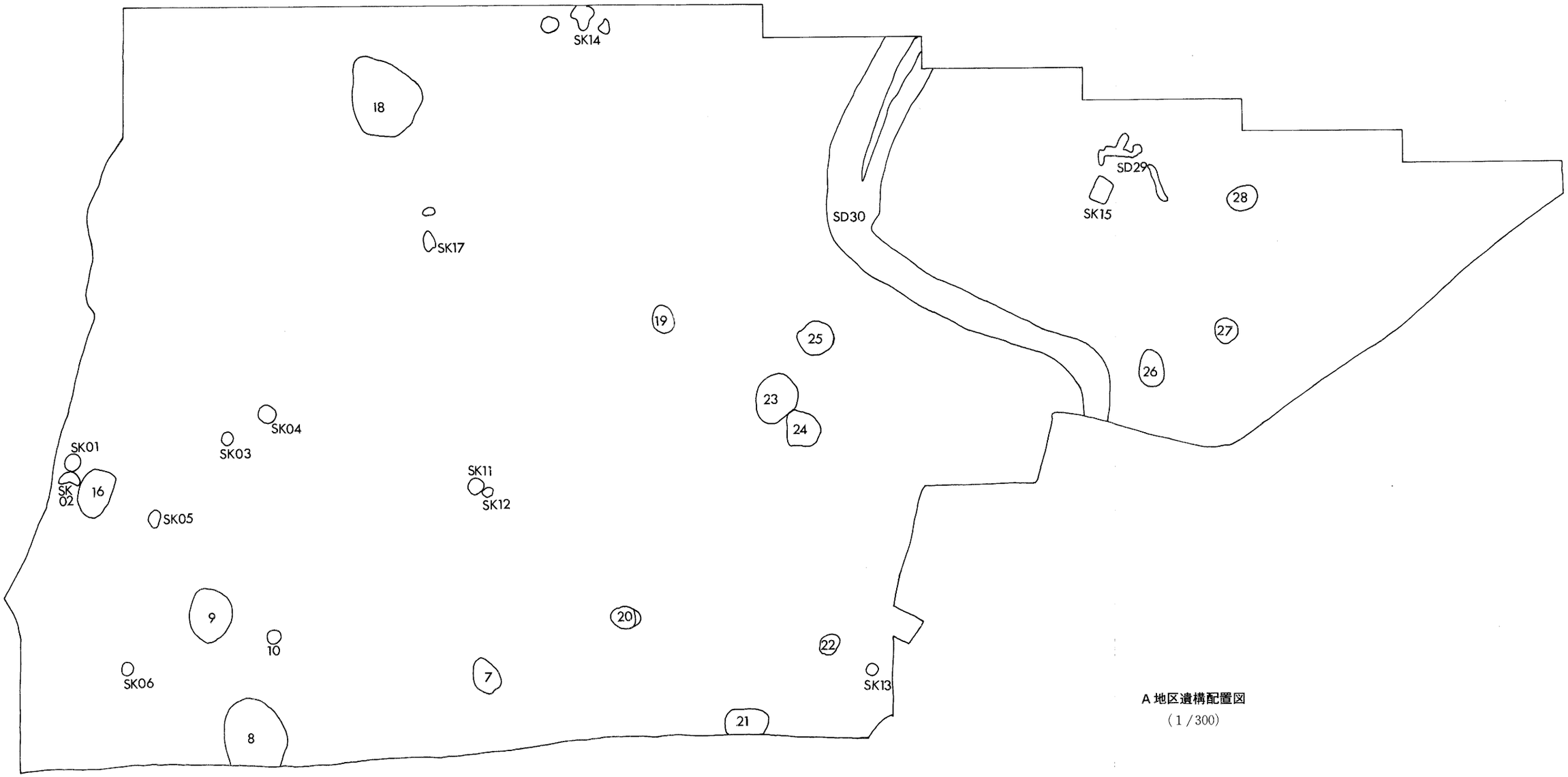
その他の遺構ではSK13、SK15の遺構内面が焼けている。遺物の出土はなく時期・性格ともに不明である。

特殊遺構と称しているものは、径２～５ｍ、深さ50cm～２ｍの不正円形を呈し、個体差が大きい。遺構面での確認ではドーナツ状に黒色土がみられ、中央部にローム層が盛り上がるように堆積している。遺物の出土はみられない。この特殊遺構は遺跡以外の地でも、ローム層上面まで削平した場合にみられることがあり、人為的なものとは考え難い。

なお、Ｂ地区・Ｃ地区でも遺構面で特殊遺構の輪郭を確認しているが、発掘はおこなっていない。

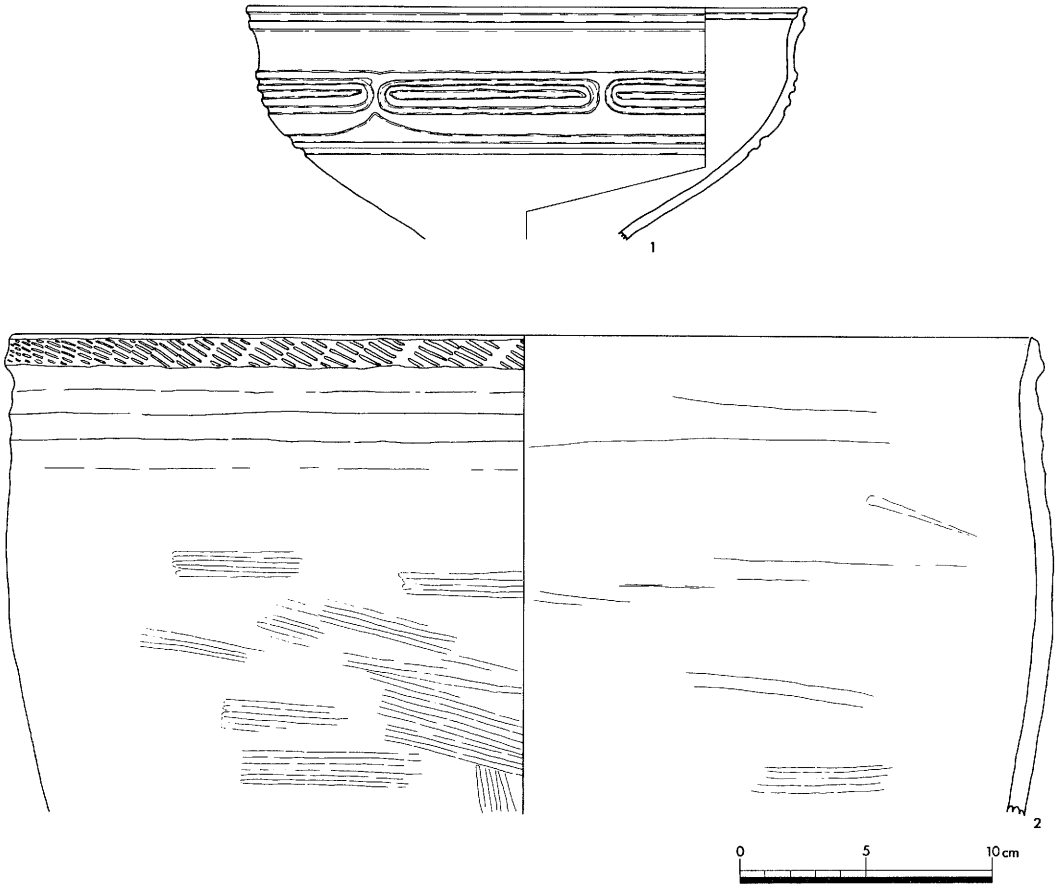


第４図　遺構図　(1/30)



A 地区遺構配置図

（1 / 300）



第6図　SK 01出土土器

1は精製の浅鉢形土器で、先の丸い棒状工具で楕円工字文が描かれている。文様は4単位で楕円文は8個になる。口縁部内面には沈線が一条みられる。外面は丁寧に磨かれており、上半部は赤色顔料が塗られている。内面は外面のように磨かれてはいない。口径は22.2cm、器高は現存部で9cmを測る。器厚は薄く、0.4cmにすぎない。

2は粗製の深鉢形土器で、口径41.4cm、器高は現存部で17.8cmを測る。口縁部は断面三角形の突帯上を櫛状工具で短く押引される。突帯直下の口縁部には指ナデで4条の微隆起線が形成されている。胴部は内外面ともに条痕文で調整されている。器厚は0.8cmで、胎土には小砂粒が多く含まれ焼成はあまり良好とはいえない。

Ⅳ 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は縄文土器・石器を中心に弥生土器、須恵器、土師器、珠洲系陶器越中瀬戸焼等である。遺構内からの出土遺物は縄文時代晩期後葉の土器２点のみで、他は包含層からの出土である。包含層から出土遺物は大半が小破片であるが出土量は多く、整理箱で46ケース分である。

１．石器

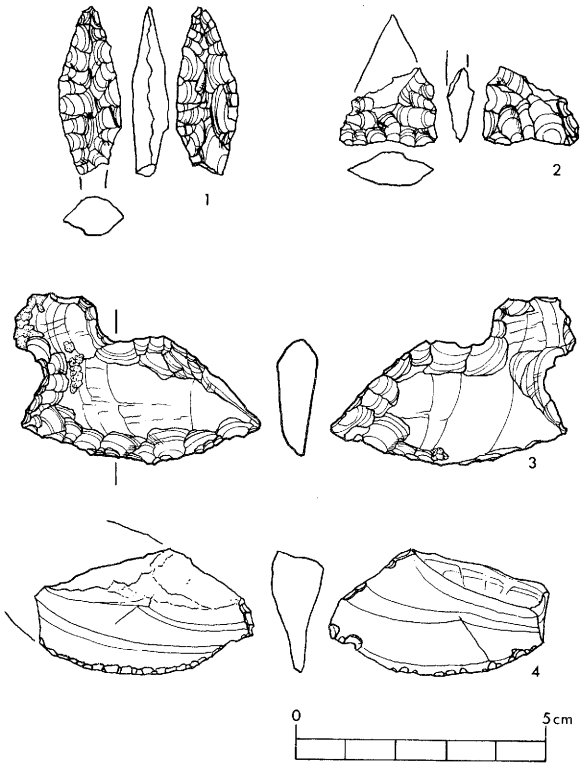
本遺跡からは第１次調査・第２次調査合せて、約2000点の石器類が出土している。打製石斧85点、石皿１点、叩石１点、石鏃２点、石錘24点、磨製石斧118点、石匙1点、スクレイパー16点、ピエス・エスキーュ５点、砥石２点がその内別でその他に莫大な量の剥片・石核が出土している。これらの石器はほとんどが第２層の黒色土層から出土したものであるが、一部表土層から出土のものもある。黒色土層は前述したように古銭、近世陶磁器をも包むことから石器類が安定した状態で包含されていたとは考えにくい。また出土した縄文土器も中期前葉から晩期後葉までおよび地点によってある限定された型式が出土するということもなく、発掘地区全体に中期前葉から晩期後葉までの土器が散布しているといった方がよい。したがって出土した石器類も中期前葉から晩期後葉までの時間幅で全体をとらえるしかない。石棒・石冠類のようにある程度時期をしぼることが可能な遺物もあるが、打製石斧・磨製石斧・石錘などのように時期によっての変態変化が小さいものは中期前葉～晩期後葉の所産として扱う。

石鏃（第７図１・２）

２点出土している。２は硬質頁岩製で、先端部は欠損している。１は鉄石英の有茎石鏃であるが、茎部は欠損している。いずれも厚みをもち、加工は粗い。後期以後のものであろう。

石匙（第７図３）

１点のみ出土。ハリ質安山岩製の横形石匙である。つまみは刃部に対して斜めの位置につけられている。刃部の両端は鋭く尖らせてある。



第７図　石鏃・石匙・スクレイパー

スクレイパー（第７図４）

剝片の一端に連続的に調整剝離を施したものをスクレイパーとする。15点出土しており、そのうち12点が鉄石英、２点が玉髄、１点が黒曜石を素材にしている。図示したものは鉄石英で細かな剝離で刃部を作っている。

二次加工ある剝片・使用痕ある剝片

一部に二次加工が施された剝片、使用痕と思われる刃こぼれがある剝片が45点出土している。ただしこの中には後世の攪乱の際に刃こぼれがついたものがあるかもしれない。石材は黒曜石、鉄石英、玉髄、チャートを用いている。

ピエス・エスキーユ

剝片の相当する２辺に敲打痕がみられるもの。２～３cmの小形のものが５点出土している。

打製石斧（第８～17図）

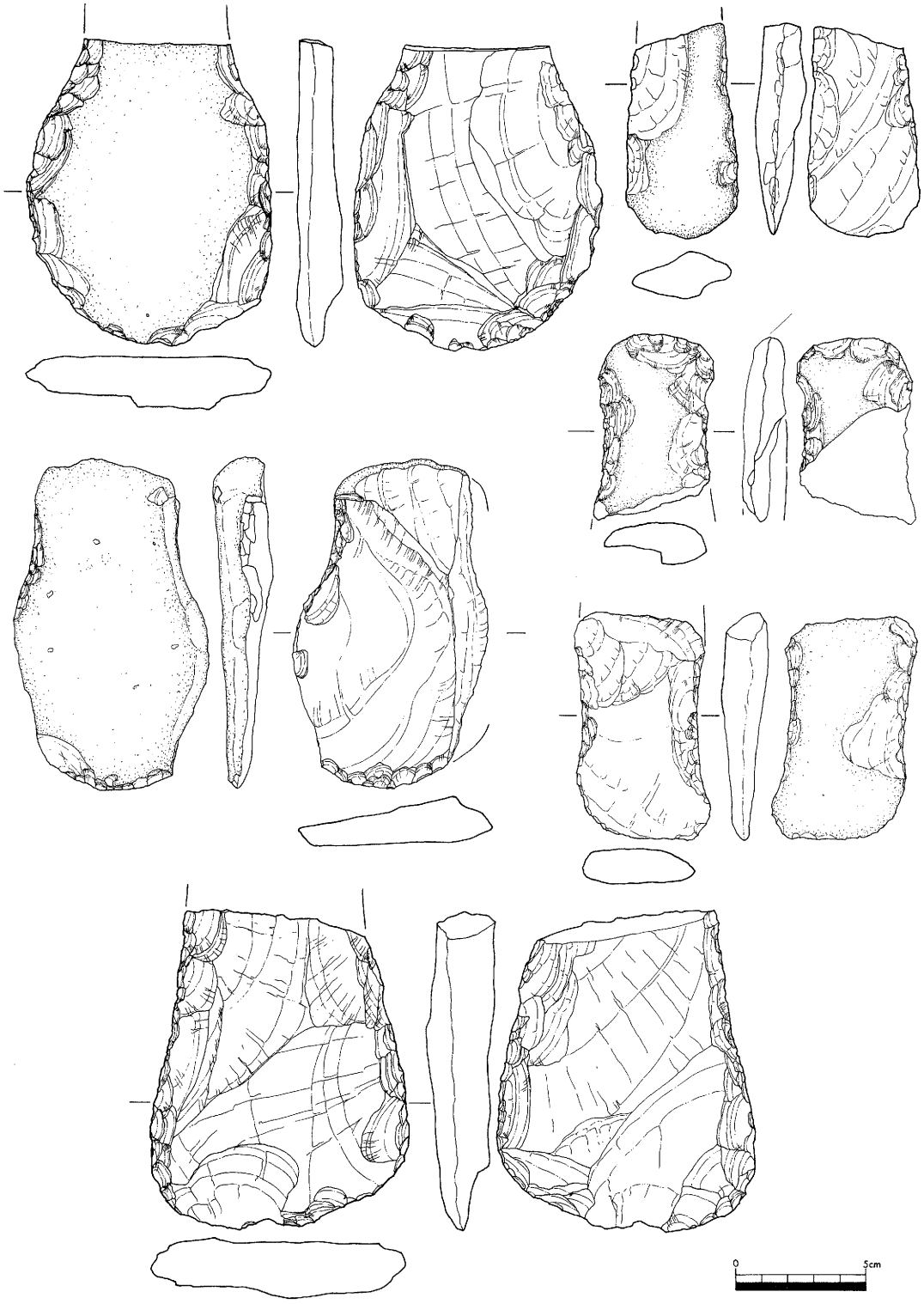
85点の打製石斧のうち、完形品は26点で、刃部を失っているもの12点、頭部を失っているもの32点、その他15点である。石材は粘板岩・砂岩・花崗岩・凝灰岩などを用いる。器厚が薄くて、幅広の鍬状の打製石斧は主として粘板岩を使用している。打製石斧の製作には大きな母岩から剝離した剝片を用いるものと、扁平な礫をそのまま縁辺を加工して石斧に仕上げたものがある。形態は撥形、分銅形、短冊形の３種がみられる。短冊形・撥形と分類したもののうち、特に幅広で厚さが極めて薄い鍬状のものが存在する。縄文中期の代表的な遺跡である天神山遺跡、大光寺遺跡からの出土品には、こうした鍬状の打製石斧は含まれていない。また後期のほぼ全般の土器を出土する黒沢遺跡から採集されたものの中にも類例をみいだすことはできない。早月上野遺跡に特徴的な形状と考えるべきなのであろうか、それとも晩期の所産と考えるべきなのであろうか。縄文晩期農耕論の中でしばしば引合いに出される九州の石鍬状の打製石斧に形状は近いものと思われる。早月上野遺跡から出土したものも縄文晩期の所産である可能性が強いと考えられよう。鍬状の石斧は粘板岩を用い、摂理面をうまく利用して素材を薄く剝離し、縁辺部を簡単に加工し成形したものである。長さは推定も含めて15cmを越える大形品ばかりで、厚さは２cmを越えない。数量は７点である。

玉砥石（図版20下）

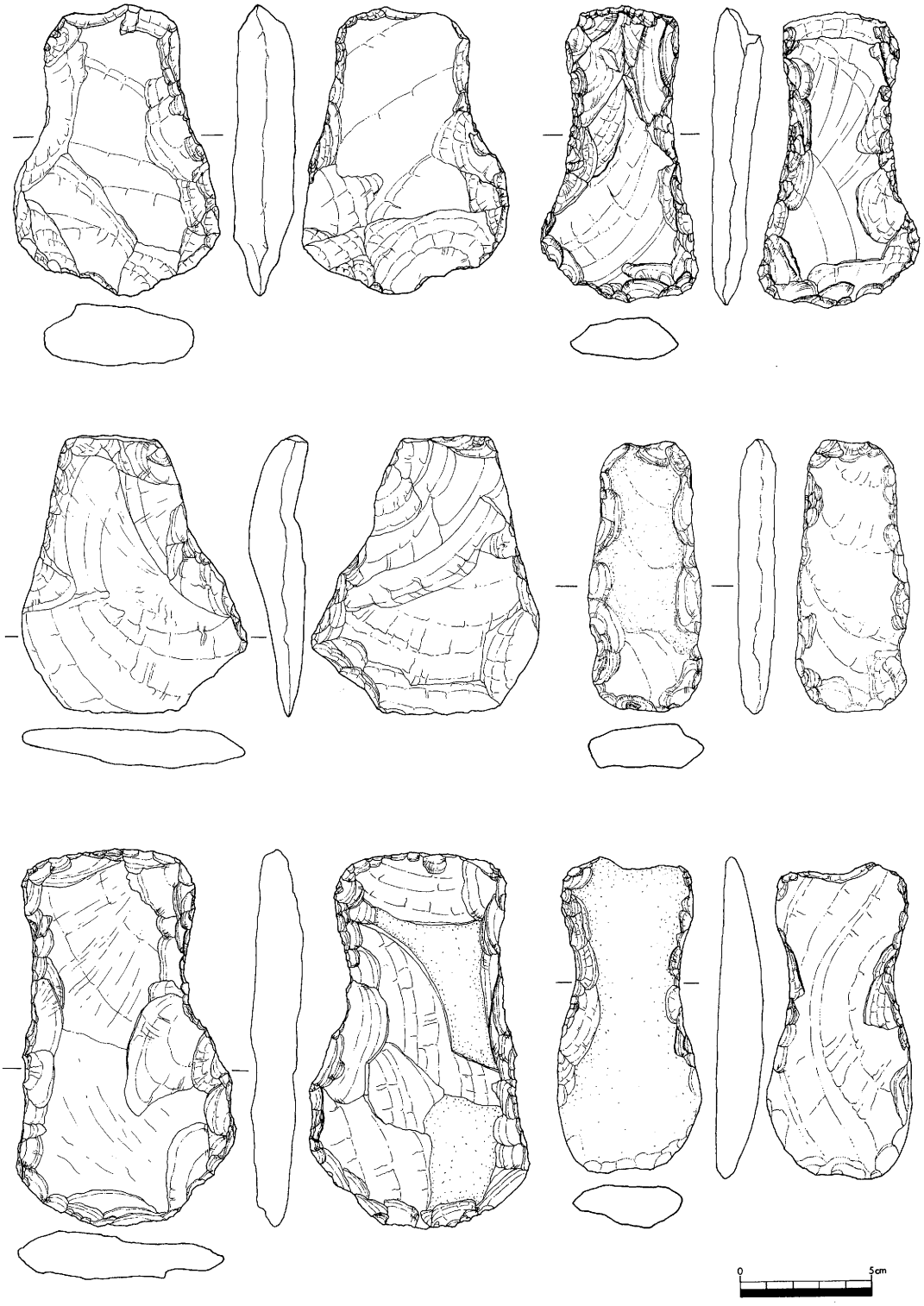
砂岩の大きな扁平礫の表面に数条の幅0.5～1.0cm の溝がつけられたもの。今回の調査では２点出土している。いずれも破損しており、10cm角ほどの破片となっている。過去の調査においても数例出土しているが、玉類の出土がみられず玉砥石としての機能に疑問が投げかけられていた（富山県教委　1976)。しかし今回の調査で若干の玉類が出土しており、玉砥石とみなして大過ないであろう。

叩石（図版21下）

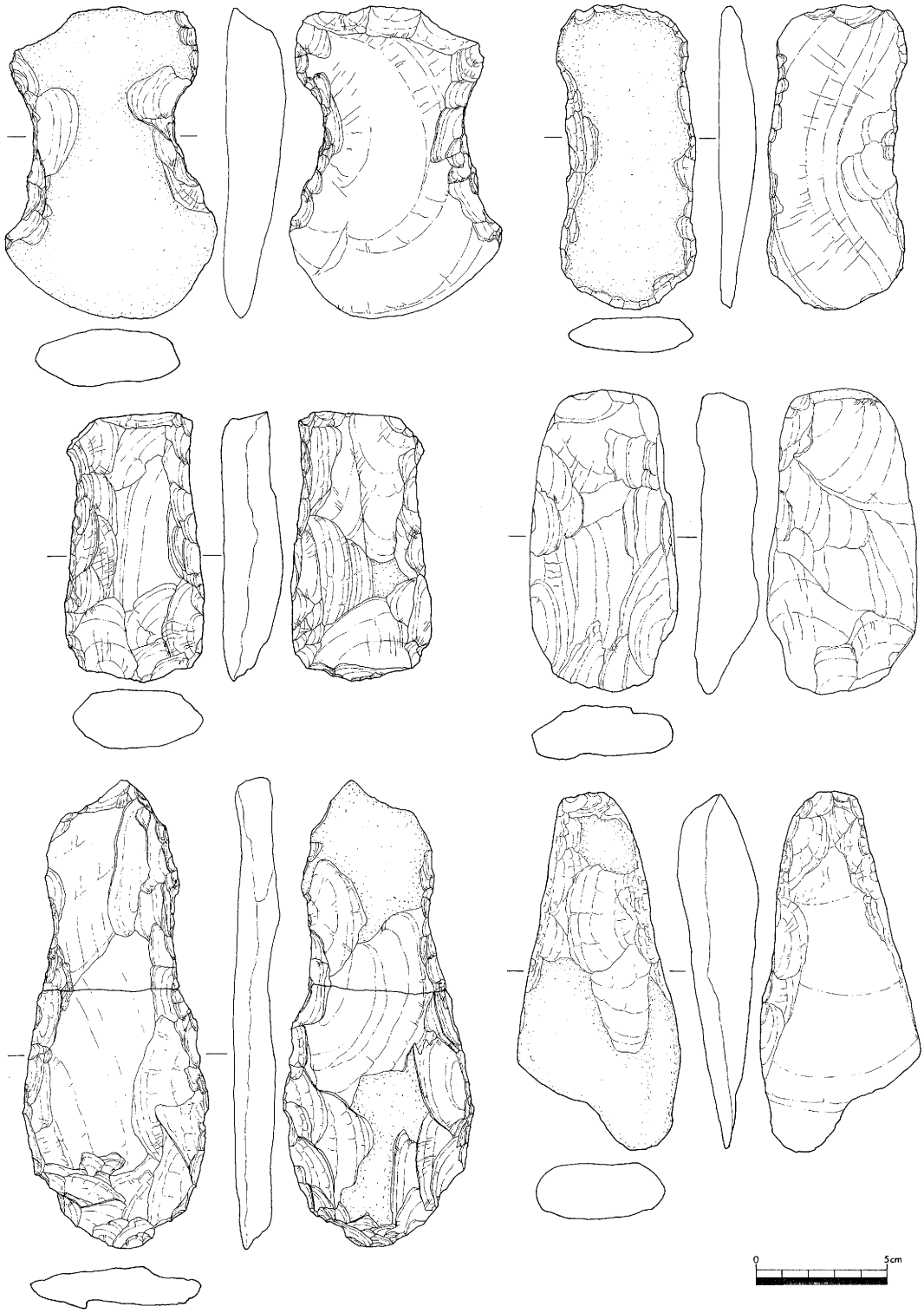
１点出土している。手頃な凝灰岩の礫の一端に敲打痕がみられるもの。敲打痕は極めて細かく石器製作で使用したものではないと思われる。



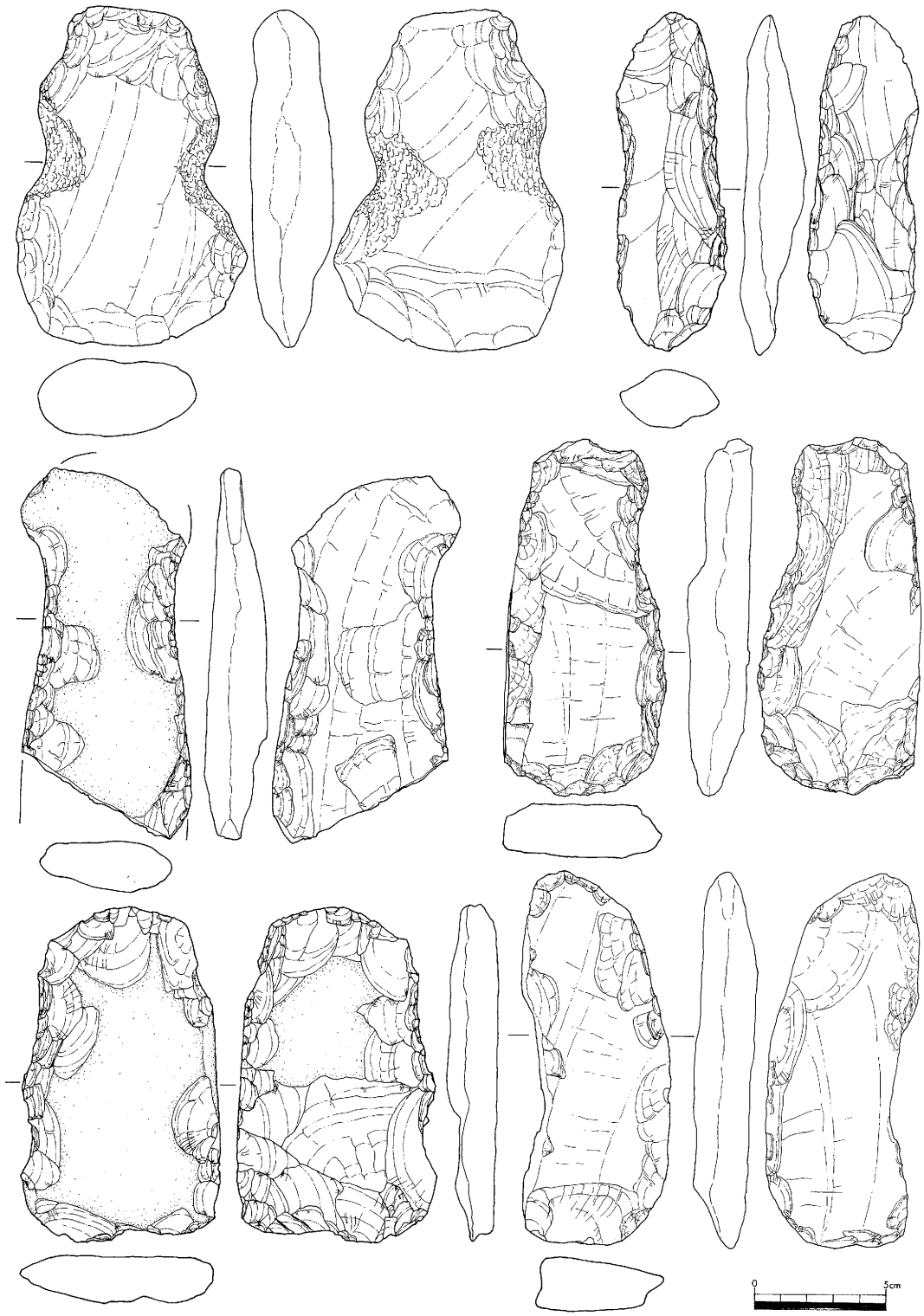
第8図　打製石斧

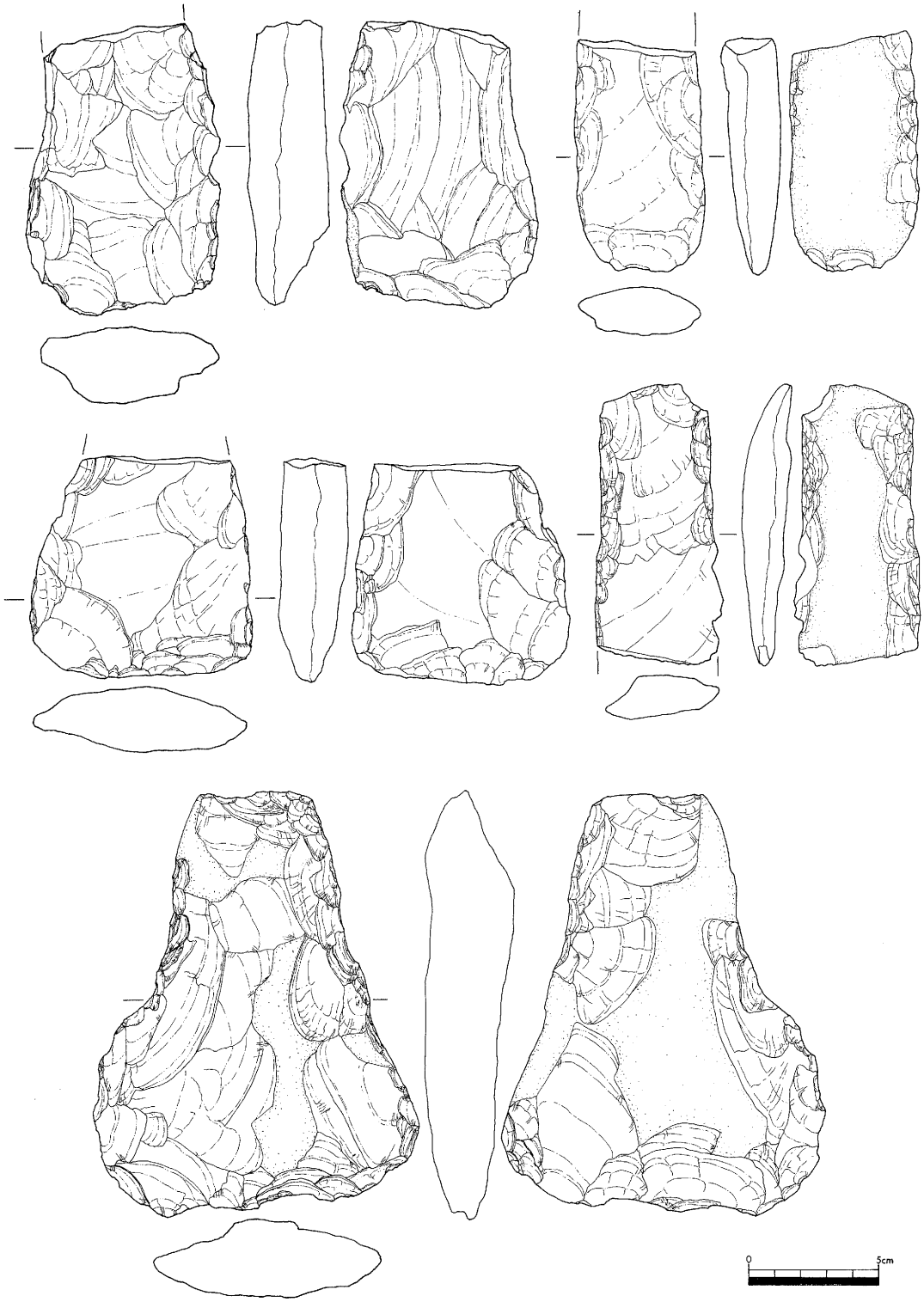


第9図　打製石斧

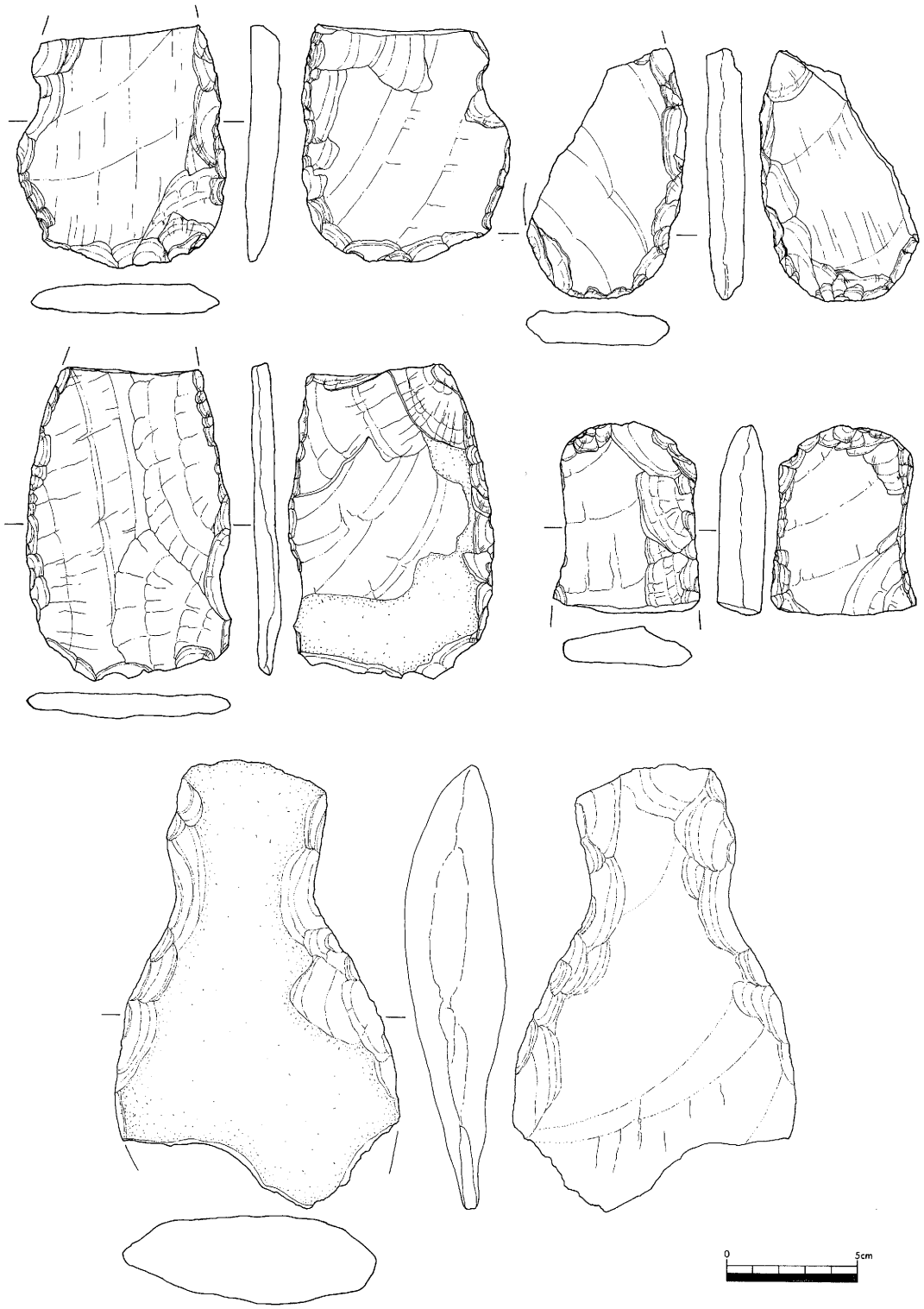


第10図　打製石斧

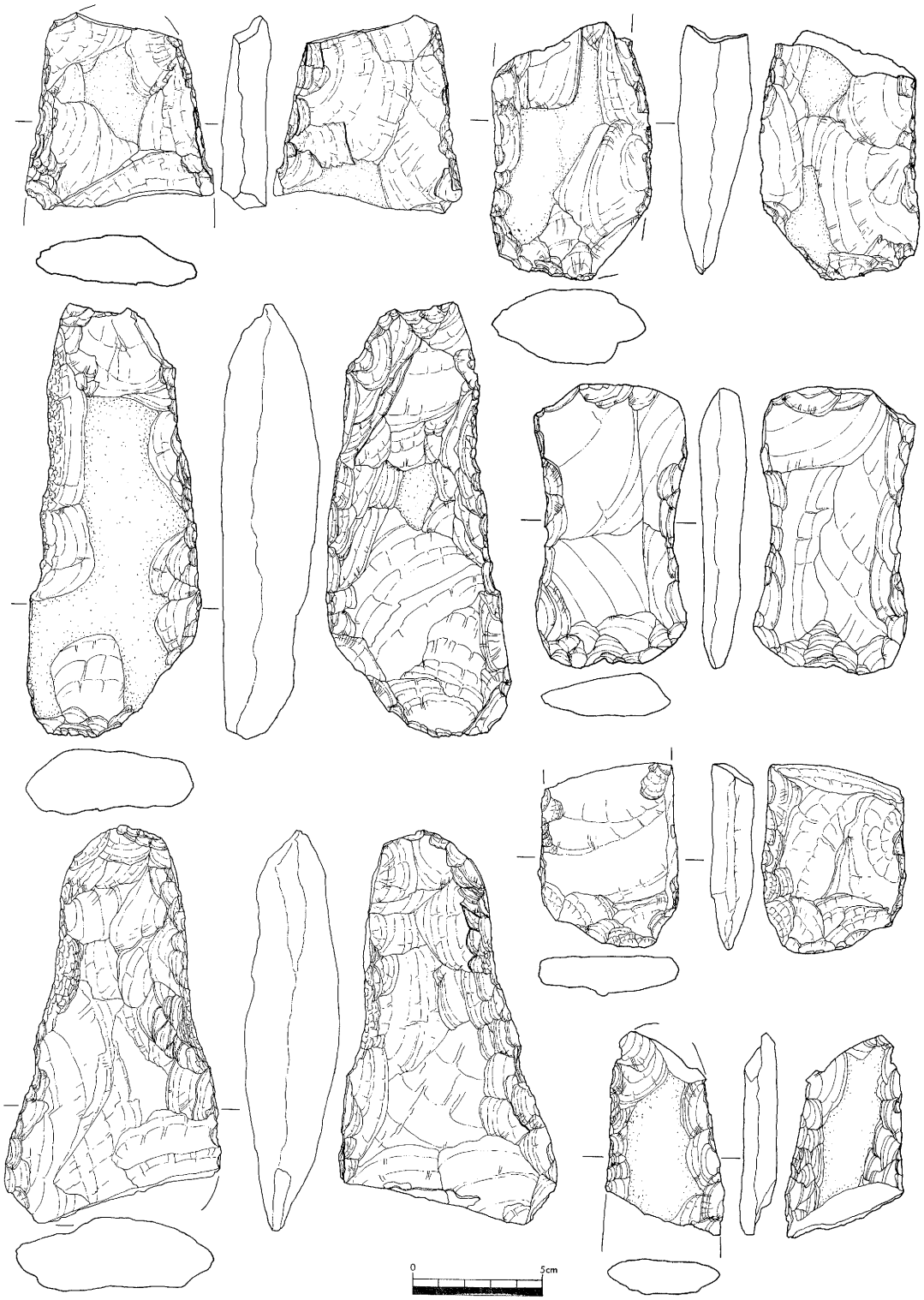

0
5cm



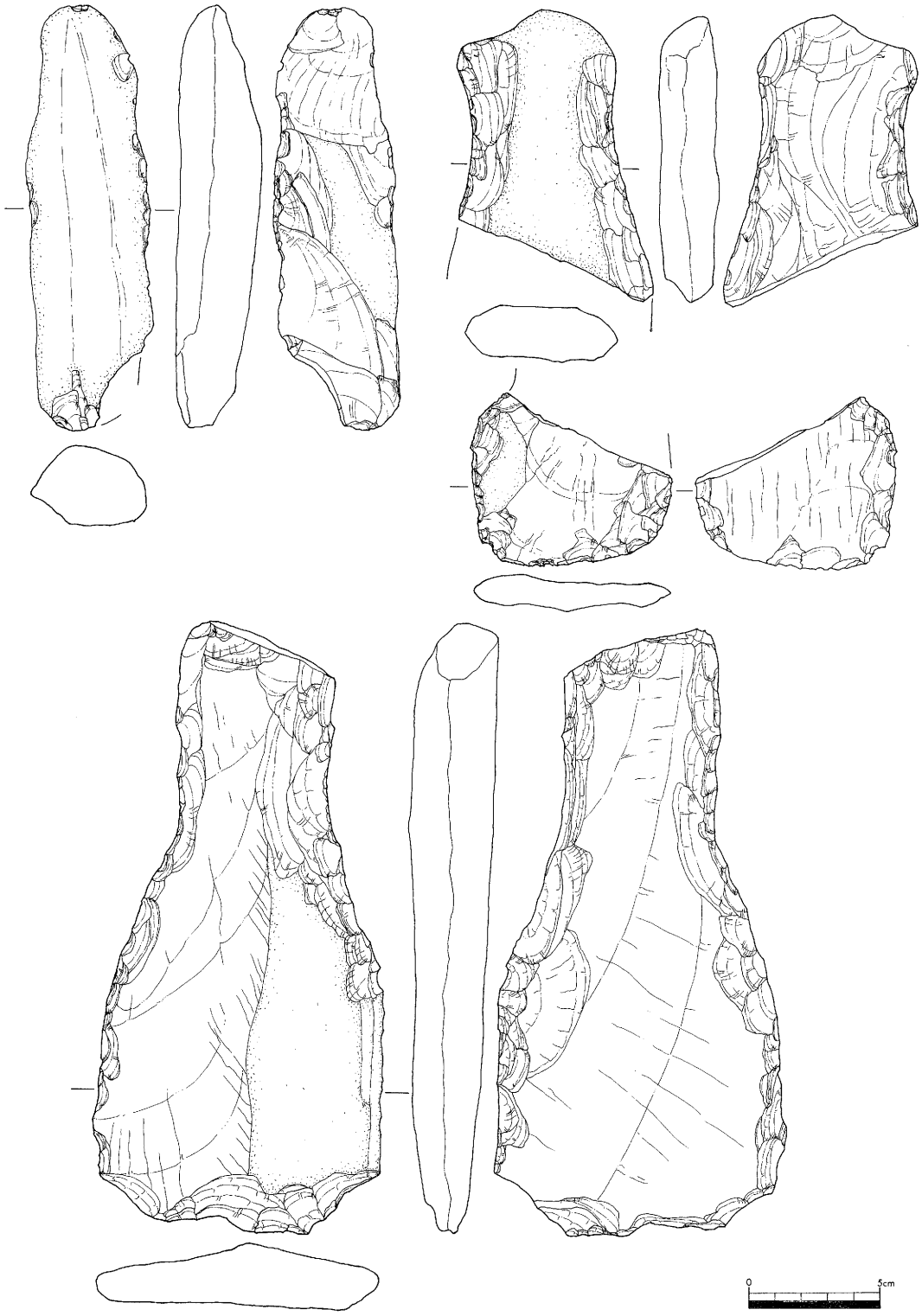
第12図　打製石斧



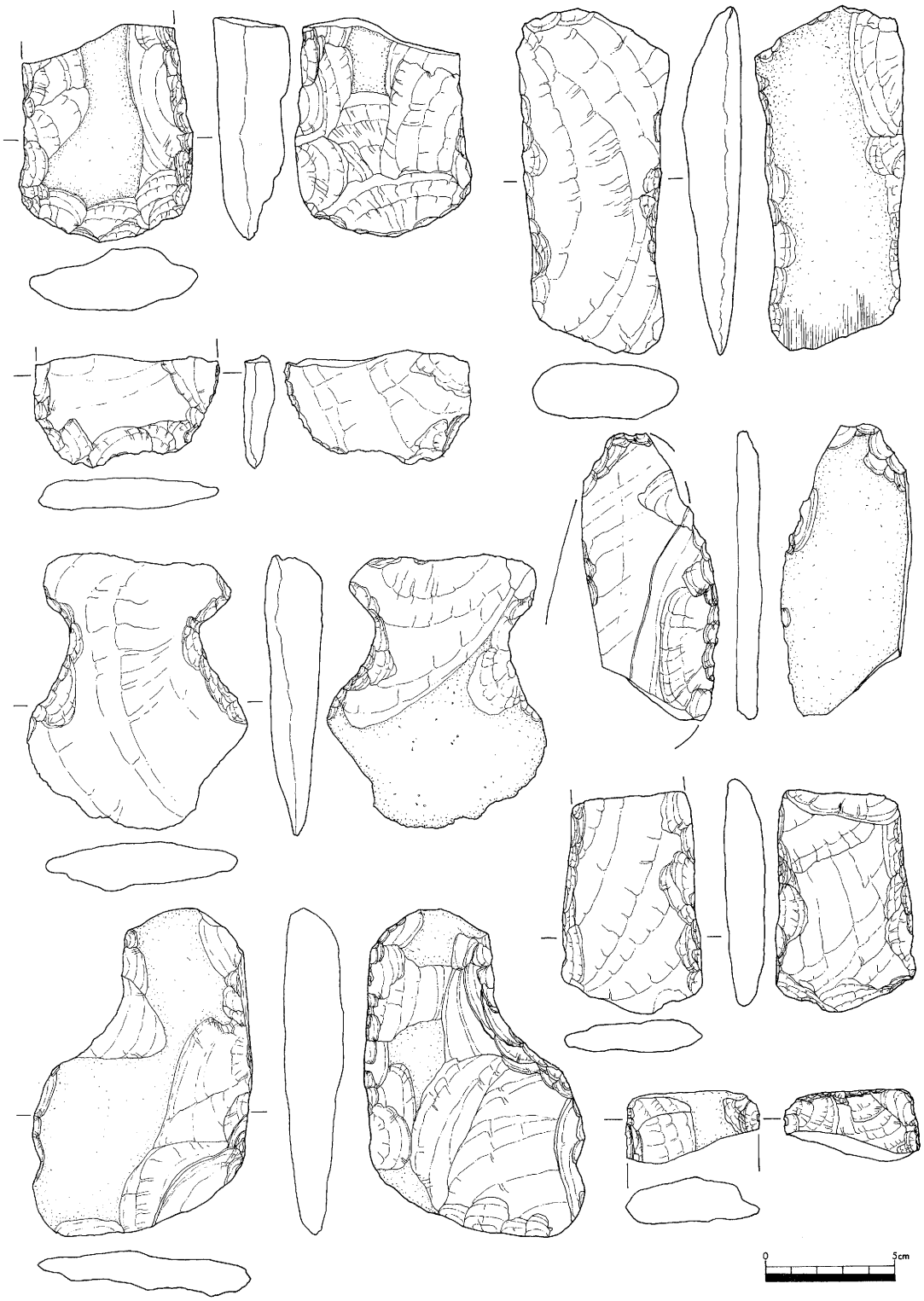
第13図　打製石斧



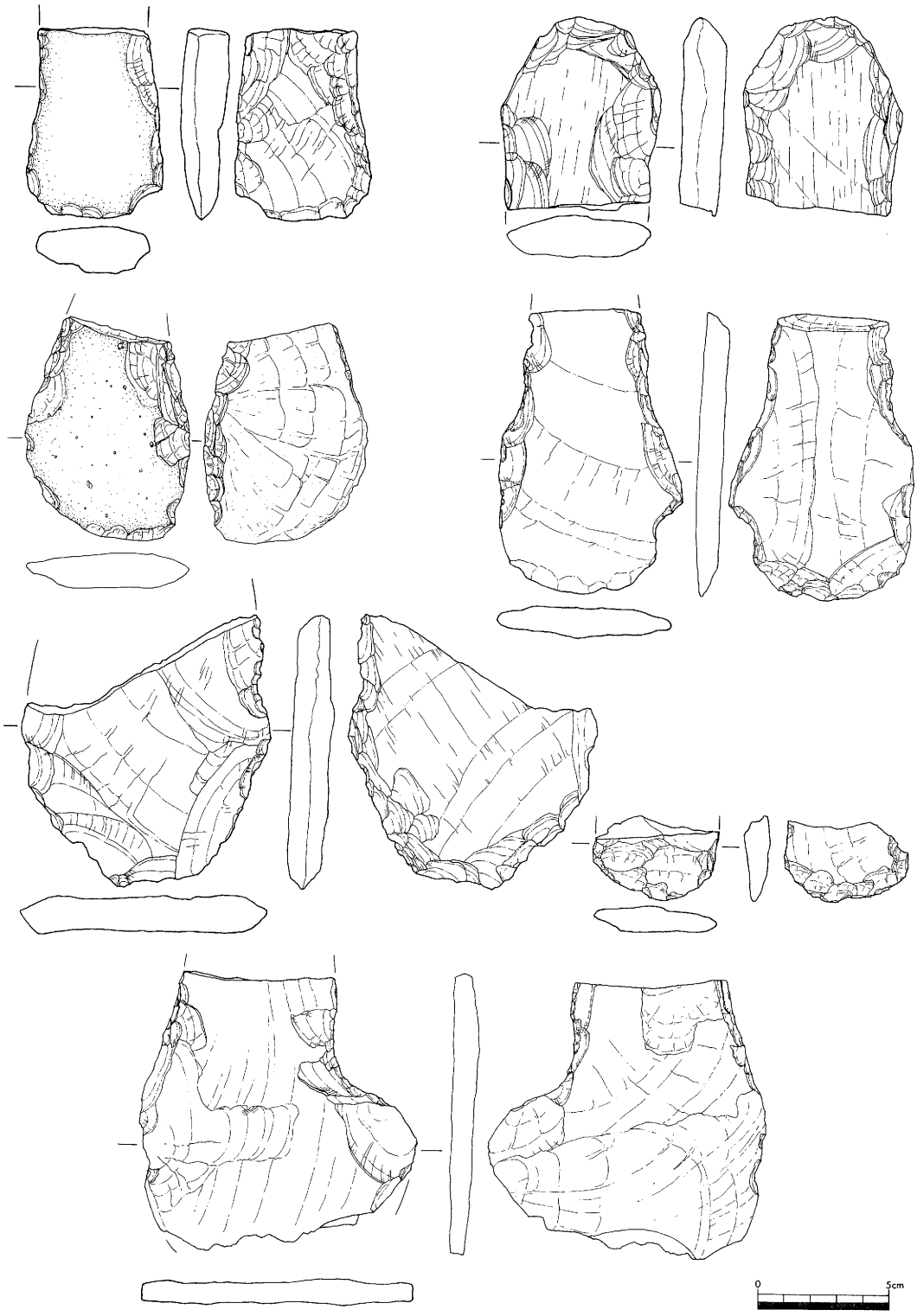
第14図　打製石斧



第15図　打製石斧



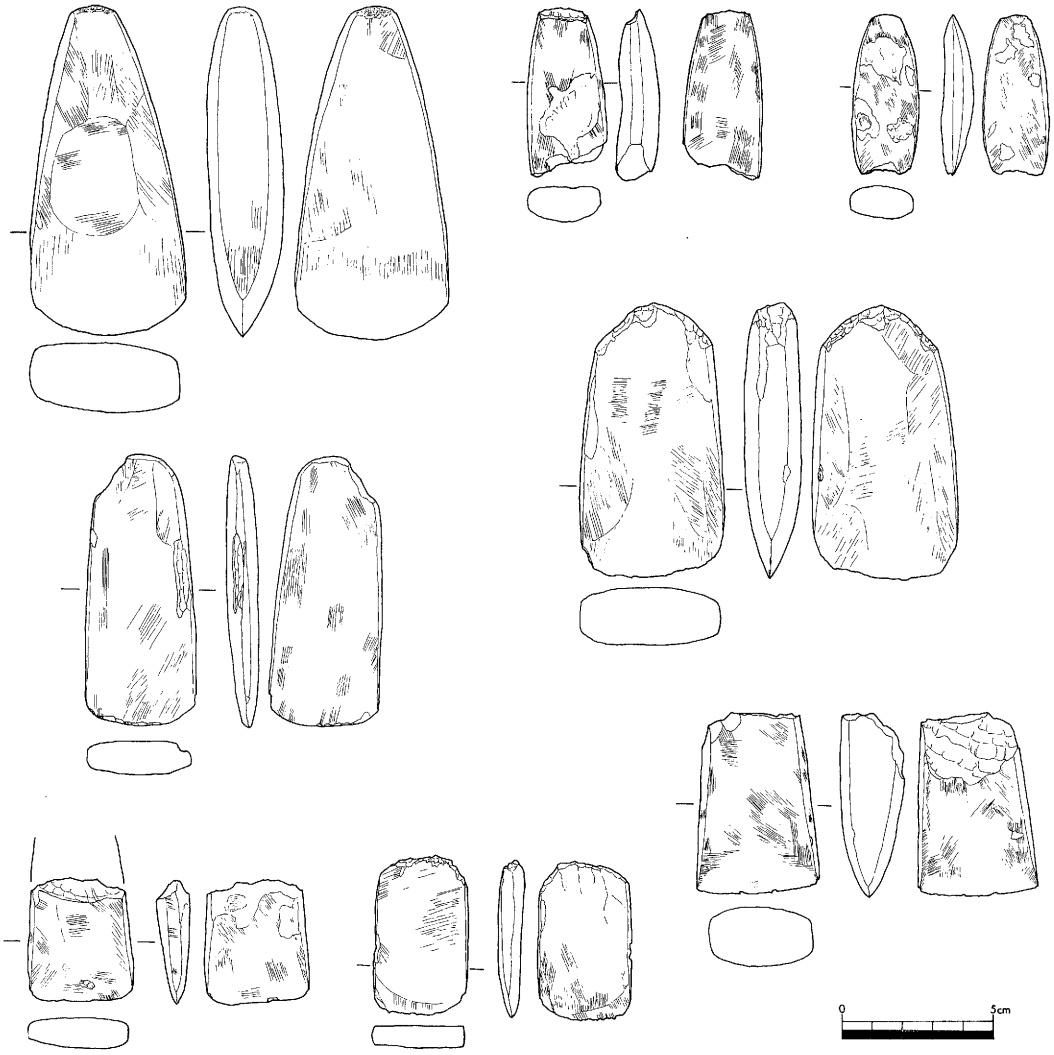
第16図　打製石斧



第17図　打製石斧

磨製石斧（第18・19図）

磨製石斧は118点出土している。刃部が欠落していて頭部が残っているもの52点、頭部が欠損していて刃部側が残っているもの55点、完形品11点がその内訳である。磨製石斧の形態は大形（長さ10cm以上)、中形（８cm前後)、小形（６cm未満）の３種がみとめられる。刃部の形状は、大形はやや丸みをもつもののみで、中形・小形の中には刃部が直線的でノミ形のものもある。注目されるのは、磨製石斧の完形品・頭部破片の約３分の１に、頭部に細かな敲打痕がみられることである。こうした敲打痕は磨製石斧の製作に際して付着したものではなく、研磨がおこなわれた上から敲打痕がつけられていることが観察できる。つまり、石斧の使用に際して敲打痕がついたものと考えられる。こうしたことから石斧の用途に頭部を叩く場合が存在したということになる。機能としては楔のようなものを想定できる。この敲打痕のみられるものはすべての形態にわたって



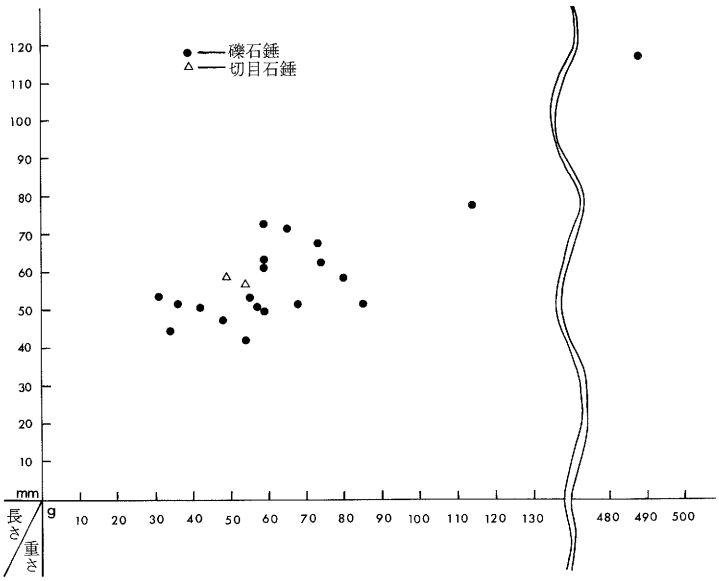
第18図　磨製石斧

第19図　磨製石斧

おり、形態差による敲打痕の違いはみとめられない。石材は大部分が蛇紋岩であるが、一部判別不明なものがある。なお、磨製石斧の未製品と思われる蛇紋岩製の敲打で斧状に形状を整えたものが2点ある。製品・使用済のものに対する未製品の割合は極度に小さいといえる。これは打製石斧にもいえることであるが、遺跡の中の場の機能を表していると思われる。

石錘（第20・21・22・23図）

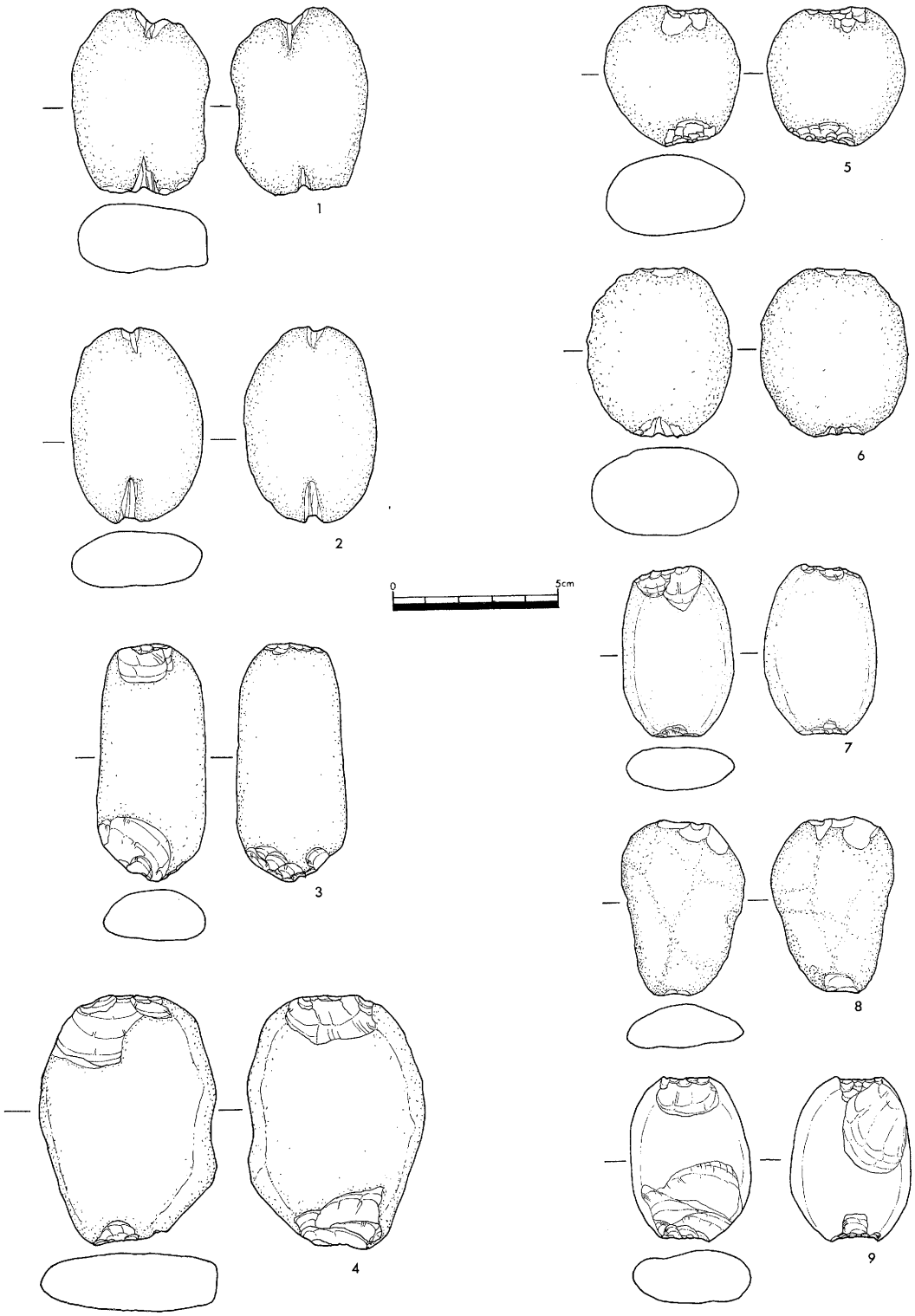
石錘は24点出土しており礫石錘と切目石錘の2種がある。切目石錘は2点のみで他はすべて礫石錘である。石錘の大きさと重量の関係を第20図・表1に示すと、礫石錘の大部分が切目石錘と大きさ・重量の点で同じグループに属することがわかる。礫石錘の中で欠損品2点を除いた20点のうち18点までが85g 以下である。また石材の点でも礫石錘と切目石錘の差はみとめられない。大形の2点のみが別の機能を持つと考えられる。富山県内では切目石錘の出土例が少なく、礫石錘数10点の出土に対して切目石錘1・2点の出土というのが一般的である。魚津市内は大小の河川が密集しており、早月上野遺跡のように河川に面した縄文中～晩期の大集落ではかならず大量の30～80g 程度の礫石錘が大量に出土している。



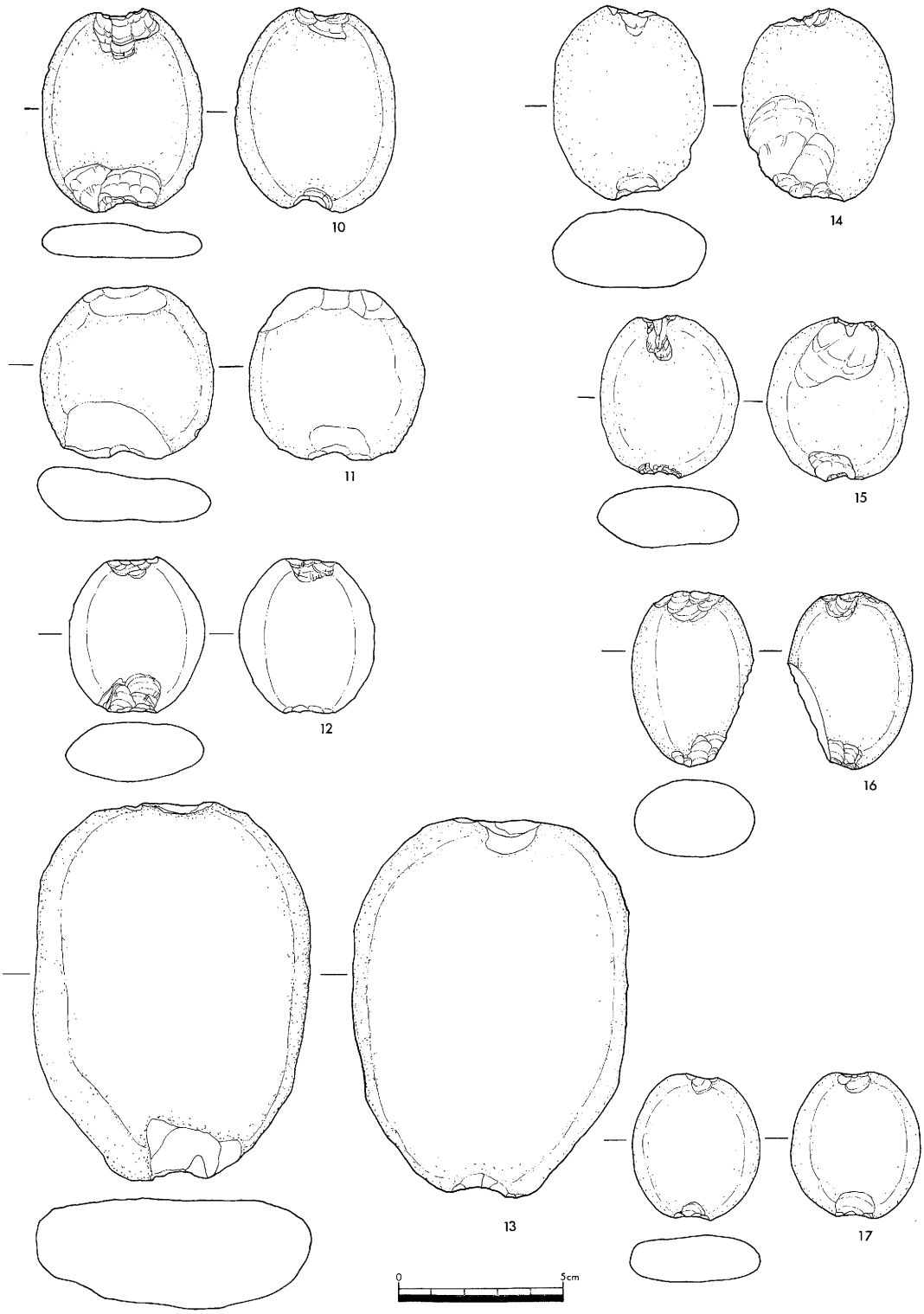
第20図　石錘の長さと重量の関係図

近年、石錘の分布・形態などの差から切目石錘を漁網錘、礫石錘を編物の錘具と想定する考え方が示されている（渡辺　1973他）。しかし、早月上野遺跡出土の例からは、礫石錘と切目石錘の差は認めがたい。当地の歴史的環境を考慮すれば、生業として漁業の比重が高い点など、本遺跡出土の礫石錘が切目石錘と同様に漁網錘と考えられる。

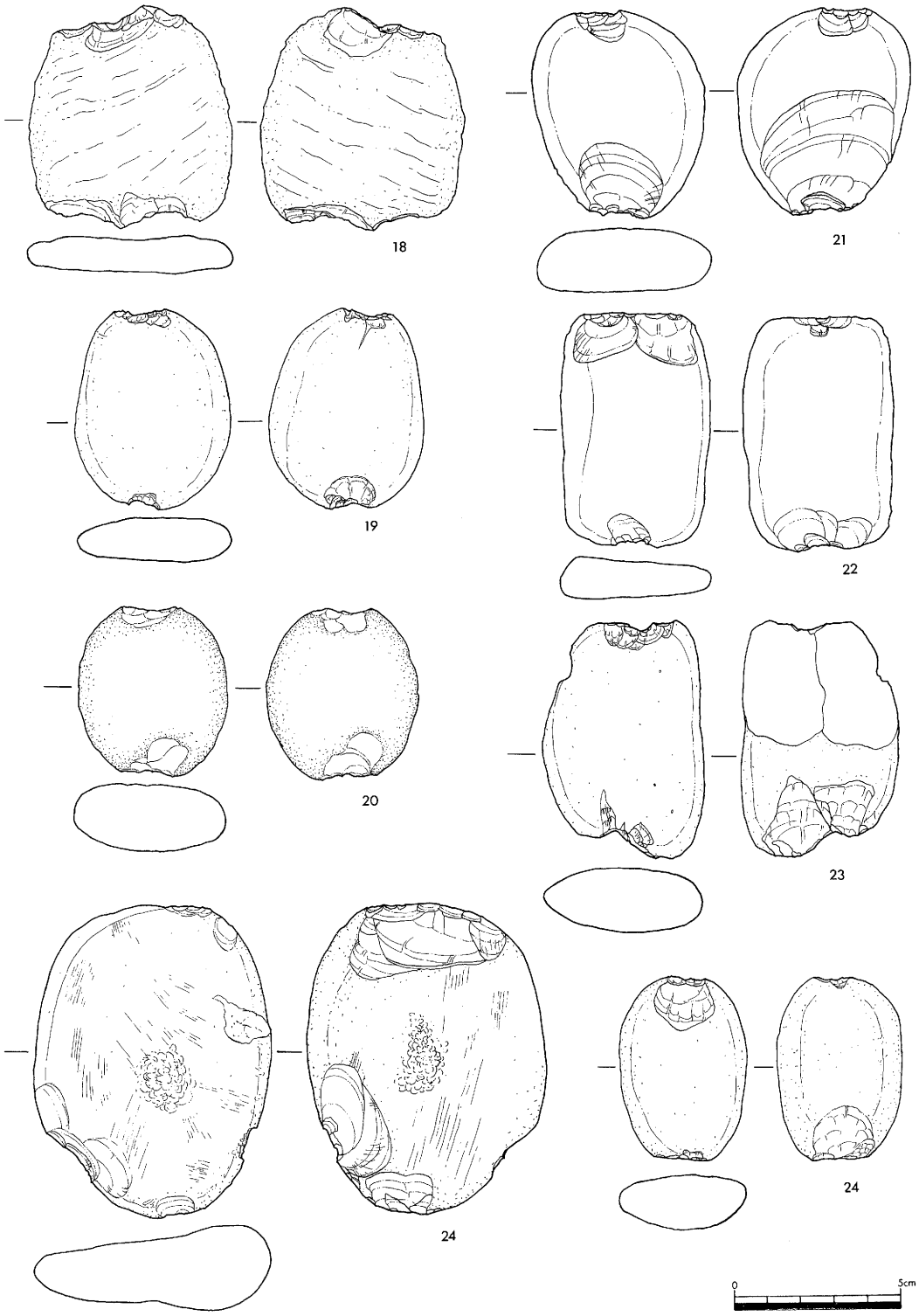
加賀藩領であった江戸時代に物成として鮭、鱒、鮎等がこの地域に課せられていた記録が残っており、それを証明するように大量の越中瀬戸焼の土錘が上中島台地から出土している。早月上野遺跡の1974年・75年の発掘調査では平安時代の遺物・遺構が検出されているが、土錘が出土している。また同じ台地上の奈良・平安時代の集落佐伯遺跡からも土錘が出土している。中島地区は早月川と角川に挟まれており、現在でも鮎などの魚類が豊富にとれる。このように各時代において漁業が生業の中に大きなウエイトを占めていると考えられる当地域は、縄文時代にも当然河川を利用した漁業を考えることができる。早月上野遺跡出土の礫石錘は、他に土錘等が出土していないことから漁網錘と考えてよいであろう。



第21図　石錘



第22図　石錘



第23図　石錘

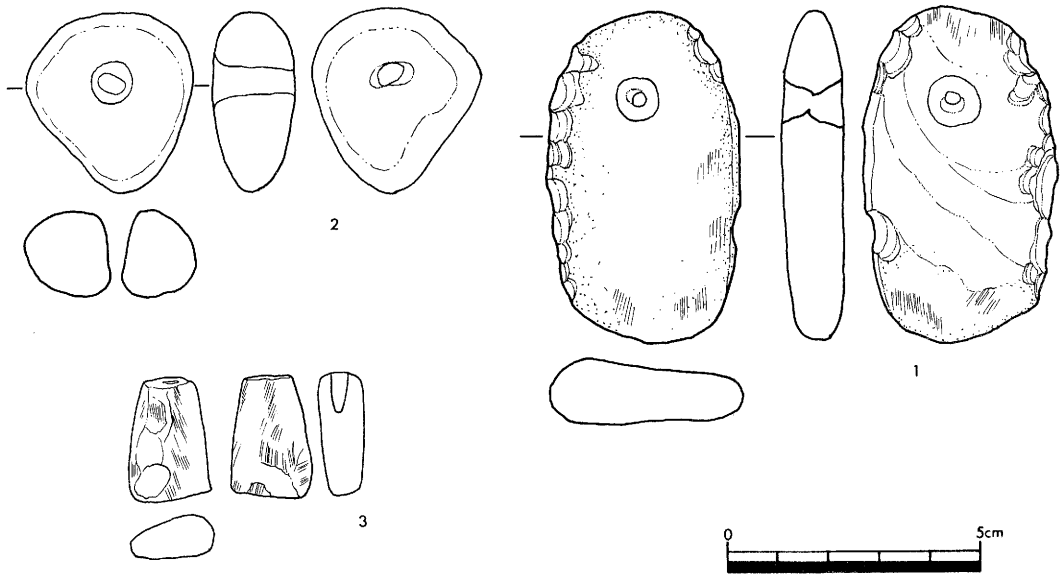
なお、第23図25は扁平な礫の中央部に敲打によって凹みがつけられており、また擦痕や縁辺部に敲打痕がみられ凹石または敲石と分類すべきものであるが、縁辺の３ヶ所を打ち欠いており石錘としても使われたものと思われる。

番号	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他	番号	長さ	幅	厚さ	重量	石質	その他
1	57mm	42mm	21mm	54g	凝灰岩	切目	14	59mm	57.5mm	24.5mm	80g	花崗岩	
2	59	40	17	49	砂　岩	〃	15	50	33.5	18.5	59	砂　岩	
3	73	33.5	15.5	59	〃		16	54	38	23.5	(70)	〃	欠損
4	78	54	18	114	粘板岩		17	45	39	14	34	〃	
5	42.5	42.5	24.5	54	砂　岩		18	68	62	11.5	73	安山岩	
6	52	45	27	85	花崗岩		19	62	47	14	59	凝灰岩	
7	52	34	13	36	砂　岩		20	52	46	20	68	花崗岩	
8	54	37.5	13.5	31	凝灰岩		21	63	53	19	74	砂　岩	
9	51	36.5	16	42	硬質砂岩		22	72	46	13	65	粘板岩	
10	63	49	11	59	砂　岩		23	72	49	20	(74)	凝灰岩	欠損
11	53.5	54	16	55	凝灰岩		24	56	38	17	57	砂　岩	
12	47.5	41.5	18	48	〃		25	95	72	26	174	〃	
13	117	84	34	188	砂　岩								

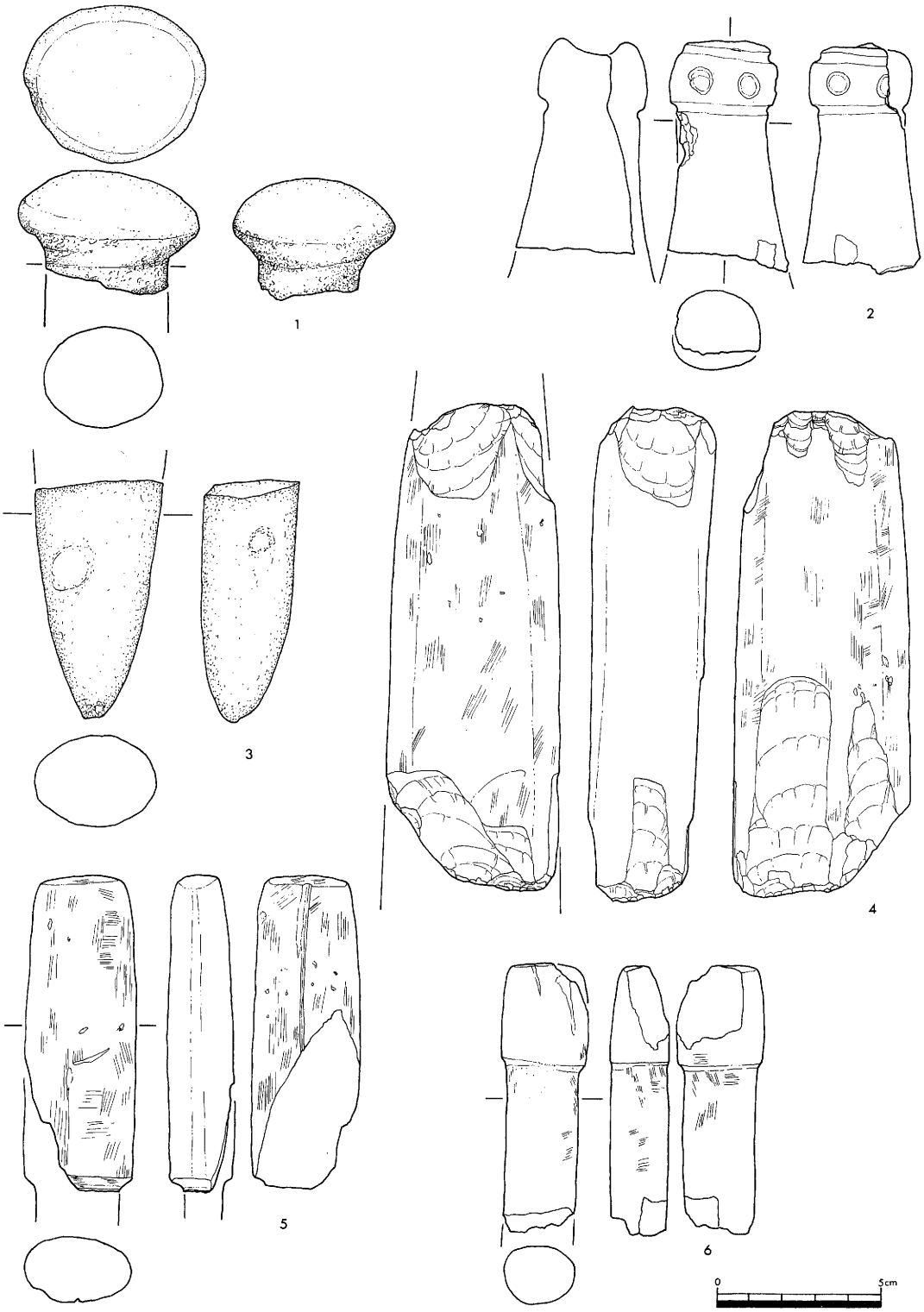
表１　石錘一覧表

玉類・石製品（第24図）

玉類は３点出土している。１は凝灰岩の扁平礫の縁辺を敲打で成形し、一部を研磨で仕上げている。２は硬質砂岩の川原石の中央部に穿孔したもの。３は翡翠製で敲打で成形し全体を研磨している。中央部の穴は約３分の１しかあけられておらず、途中で断念したものと思われる。翡翠としてはあまり良質のものではない。石製品としては小形の棒状のものが３点出土している。長さ２～３cm、径約0.5cmのもので全体が研磨されている。滑石製。この棒状石製品は、早月上野遺跡のほか石垣遺跡からも採集されている。



第24図　玉類

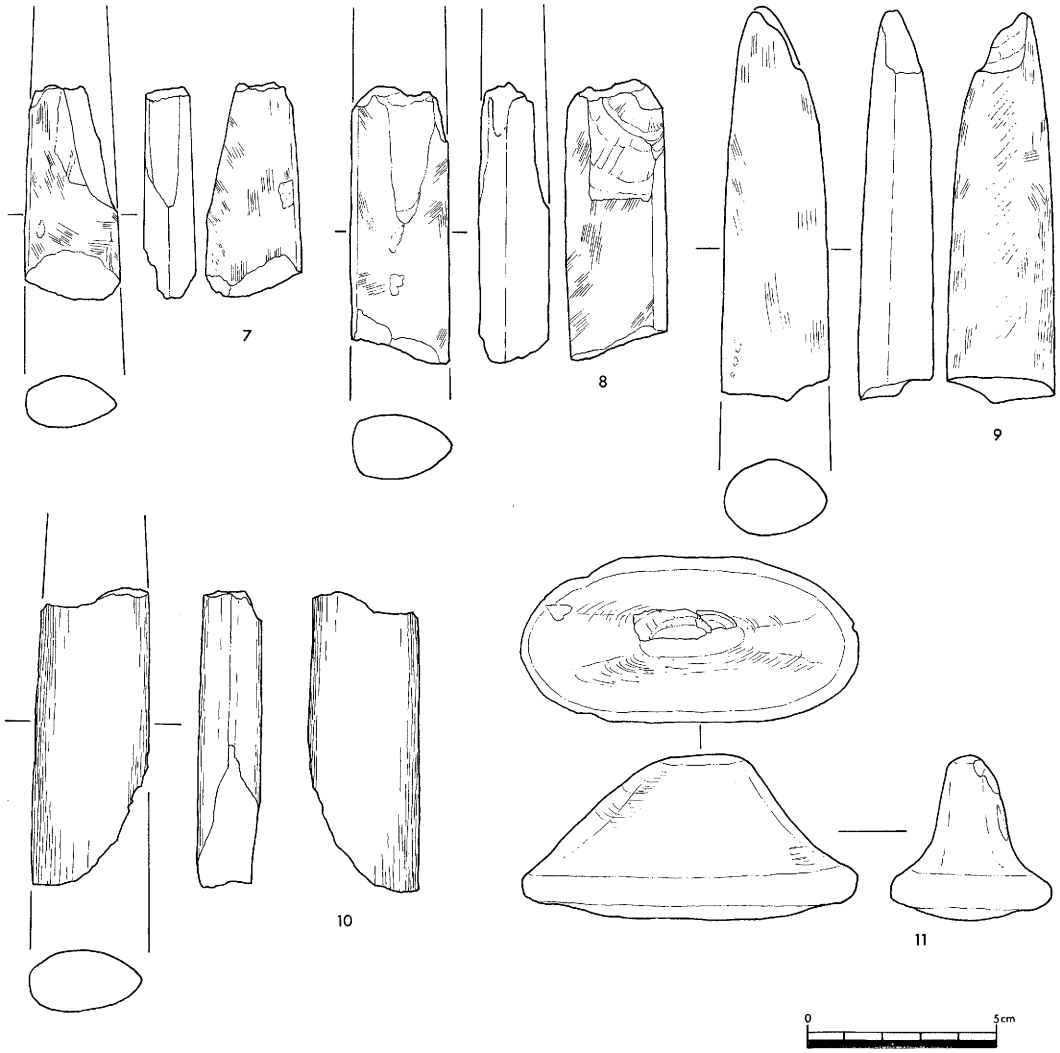


第25図　石棒　石剣　石刀

石棒、石剣・石刀、石冠（第25・26図）

石棒は５点出土している。２・６は小形で丁寧な作りである。いずれも熱を受けて色調は赤みをおびている。４はやや大形の石棒で両端は折れている。石剣・石類もすべて破損品である。断面はすべて楕円形で片方に刀部とみなせる稜をつくっている。石材は縁泥片岩、粘板岩を用いている。石冠は１点のみ出土。整形は簡単におこなわれており、石冠にしばしばみられる底面の凹みはつけられていない。

さて今回の調査で、石棒、石剣・石刀は計10点出土しているがいずれも破片となっており完形品はみられない。また石棒２点は加熱を受けた痕跡もみとめられる。過去の調査などでも石棒類はかなりの数量が出土・採集されているが、いずれも破片となっているものばかりである。これは石棒類の使われ方を示唆しているものと思われる。実用品ではないと考えられている石棒類が破損して出土するということは、これらが意図的に破損されたものと考えてよいであろう。



第26図　石剣　石刀　石冠

石器組成

先述したように今回の調査では打製石斧85点、磨製石斧118点、石鏃2点、石錘24点、石匙1点、スクレイパー16点、石皿1点、叩石1点、砥石2点、石棒5点、石剣石刀5点、石冠1点、玉類3点、棒状石製品3点、ピエスエスキーユ5点が出土している。打製石斧・磨製石斧の数量に較べて、石鏃はわずかに2点しか出土しておらず、縄文時代の石器組成としては極めて片寄りがみられる。こうした石器組成は地域的・時期的特性を表わしている、遺跡内での発掘地点の特徴を表わしている、の2つの原因を考えることができる。

発掘区は住居址群が存在すると予想される地点から約200～300mを離れた遺跡の縁辺部であり、住居址内または住居址近辺での石器組成とは懸離れたものである可能性もある。

富山平野の縄文遺跡の石器組成は、ほとんどの報告書でその数量が明記されておらず、実態は不明な点が多い。私見では中期前葉を境に打製石斧と石鏃の比率が逆転し、中期中葉以後は圧倒的に打製石斧が増加し石鏃は減少する。表2に示すとおり、中期中葉以後では、発掘調査で検出された石鏃は打製石斧の3分の1にも満たないのが一般的である。隣接する新潟県における縄文遺跡の石器組成は、各期を通して石鏃の割合は多い。石鏃と打製石斧の比率に関しては、中期中葉以後富山平野と新潟県内の遺跡では大きな違いがみられる。縄文土器自体に関しても中期中葉から富山県内出土のものと新潟県内出土のものとの差が顕著になり、石器組成の変化と一致する。

	打製石斧	磨製石斧	石鏃	石錘	凹石	石皿	石槍	石錐	石匙	時期
魚津市石垣遺跡	219	137	35	43	53	3				中期前葉～晩期
〃 天神山	10	8	1	8	4	1				中期前葉～後葉
〃 桜峠	23	22	3	6	9		1			早期、中期前～後葉
黒部市新坂	2	4	1	25		2		3		前期
〃 前沢	44	35		4	1	13			4	中期中～後葉
上市町極楽寺		22	15	2	12					前期
滑川市本江	100以上	55	7	9	32			3		後・晩期
砺波市厳照寺	6	26	14	45	6	2		1	2	中期前葉
富山市蜆が森貝塚		11	11	2		1			1	前期
高岡市高田新	4		2							晩期
〃 駒方	3	2			1					晩期

表2　富山県下の石器組成（各報告書より）

2．土器

主に縄文時代中期前葉～同晩期のものが出土し、他に弥生式土器、土師器、近世陶器が少量出土した。土器の出土状況は各時期のものが入り混じった状態である。遺物量は相対的に言うと中期～晩期の順になり、遺物の大半は小破片であり複元可能なものはほとんどなかった。以下出土した土器について時代別に区分し、主なものについて概要を述べる。

縄文時代中期前葉の土器（図版１.２－１～15）

従来の広い意味での新崎式土器である。連続刺突文や隆帯土に爪形文か、稜杉状の刻み目を施した土器が特徴とされる上山田古式（小島1972、1974）も含んでいる（主体的)。花弁の長い蓮華文や格子目状の沈線もあげられる。その他、新道式に関連が求められる（図版２－６、７）又阿玉台式類似（図版２－５）の土器も見られる。近年、厳照寺式土器の提唱(富山県教委 1977)、又反論等（小島1979）があるが、筆者自身がよく理解していないため使用はしなかった。

縄文時代中期中葉の土器（図版３～６、７の一部）

天神山式土器（湊他1959）や古府式土器（高堀1954）に比定できる。天神山式土器は半隆起縄文を器面全体に展開したり、隆帯上に爪形文や篦刻み文が施される。古府式土器は、水上谷遺跡報告において深鉢形で、半裁竹管で飾るものは三種に分類され（富山県教委1974）又松原遺跡報告に於おいてはⅢ期土器の分類がおこなわれている。古府式土器研究は橋本、神保両氏により精力的に進められた。

縄文時代中期後葉の土器（図版６－３～29）

主に貝殻腹縁の条痕文を特徴とする土器をあつめた。貝殻文と沈線文の組合せの串田新Ⅱ式に比定される。その他前田式※と思われるもの（図版６－15、16)。

※前田式に関しては、岩峅野式の提唱および反論等があり、時期比定も混沌としている。

縄文および無文の土器（図版７－17～32、図版８、９）

これらの土器は縄文時代中期後葉～後期前葉に比定できるものと理解したい。

縄文時代後期前葉の土器（図版10－１～18）

気屋式、堀之内式、三十稲場式、白山Ⅴ式等がみられる。気屋式は三角形刺突の押引きや口辺部に小波状沈線をもったり、沈線内に連続刺突を加えたりするのを特徴とする（久保、高堀1951)。

三十稲場式土器について（図版10－17）

所謂「花弁形刺突文」「魚鱗形刺突文」「爪形刺突文」と称された土器は狭義の三十稲場式土器①として把握されている。県内に於いては、宇奈月町浦山寺蔵遺跡②、大沢野町布尻遺跡③、立山町古屋敷遺跡④があげられるが、いずれも伴出土器は不明であり、特殊な刺突のため注意されているものである。関雅之氏の研究によれば刺突具及び刺突テクニックにより４種（Ａ～Ｄ）に分類されている。

以下県内出土の各々を分類すると

○半裁竹管等を用いて器面に対し、横から斜めに刺突する―布尻遺跡、浦山寺蔵遺跡―Ｂ種

○棒状工具で刺突する―古屋敷遺跡―Ｃ種

○先端が丸みを帯びた棒状工具で刺突する―早月上野遺跡―Ｃ種

新潟及び隣県に於ける三十稲場式土器に関する報告は数多く、分布に関しては田中耕作氏⑥による知見が報告されている。しかしながら同氏によれば「…略…型式の確たる定義付けや型式区分…略…研究者個々人によってとらえ方が異なり…混沌としている段階にある。」ように報告されている。中村孝三郎⑦氏によるとこの土器は以下の如く説明されている。「昭和10年八幡一郎によって（縄文後期三十稲場式土器）として標準模式化され、斎藤秀平⑧の（第７輯）に採用された。以下略…。」

この土器の特殊な刺突文の土器群研究は、寺村光晴⑨、中村孝三郎⑩、稲岡嘉彰⑪、関雅之⑫氏等により研究がおこなわれている。土器内容や編年的位置付けに関しては現在二つ⑬の考え方があると思われる。

① 越路町教育委員会1970　朝日百塚、並松遺跡

② 富山県教育委員会1977　富山県宇奈月町浦山寺蔵遺跡緊急発掘調査概要

③ 大沢野町教育委員会1977　富山県大沢野布尻遺跡緊急発掘調査概要

④ 麻柄一志氏表採資料

⑤ 見附市教育委員会1971　耳取遺跡

⑥ 新発田市教育委員会1981　菅谷地区内遺跡範井確認調査報告書

⑦ 長岡市立科学博物館1966　先史時代と長岡の遺跡

⑧ 新潟県1937　新潟県に於ける石器時代遺跡調査報告、新潟県史跡名勝天念記念物調査第７輯（略…関東の堀之内式に当る…の文あり、刺突文の土器とともにバラエティーが見いだされる。中村孝三郎氏のいわれる南三十稲場式土器も含んでいる。）

⑨ 寺村光晴1957　三島郡十二遺跡Ａ地点出土の土器、越佐研究第12集

⑩ ⑦と同じ

⑪ ①と同じ

⑫ ⑤と同じ

⑬ ⑤文献によると「…略…称名寺式第１群土器から堀之内式に至る土器に限定され、堀之内Ⅱ式に相当する…略…ほとんど認められない…略」

○駒形敏郎氏はツベタ遺跡報告の中で、１～９類土器は堀之内１式に対比、10類土器はそのあとに位置するとある。（安田町教育委員会1972、ツベタ遺跡発掘調査報告）

○長岡市立科学博物館1975　根立遺跡（上層から南三十稲場式土器、その下の第２層より三十稲場式土器出土とある）

○下田村教育委員会1975　芹沢、八幡平遺跡緊急調査報告書（三十稲場式、南三十稲場式土器についての論文が掲載

縄文時代後期中葉～後期後葉の土器（図版10―19～31、図版11～13）

○口縁部裏側に沈線を持つもの（堀之内２式にもある）黒みを帯びてよく研磨されている―加曽利Ｂ式（図版10―19～31、図版11―１～10）

○縄文及び無文の深鉢をあつめた。縄文を全面にころがしたもの、沈線のあるもの等、後期後葉と思われるものを一括した。本江遺跡（小島1979）にも例がみられる。（図版11―11～19、図版12―１～33）

○やや波状の口縁部である。本江遺跡報告等33図に類似する。加曽利B_3～曽谷式並行、(図版12―34～36)

○こぶ付土器の一群。後期終末に位置づけられる。（図版13―１～５）

○上半部が外反し文様は口縁部に二条の沈線がめぐっている。井口Ⅳ期（井口村教委1980）八日市新保式（小島1981）に比定される。但し本例では縦沈線で切る文様のものはない。（図版13―14～21）但し16・17は別

縄文時代晩期の土器（図版14）

北陸における晩期編年は４期提唱されている（高堀1965)。勝木原遺跡報告では晩期Ⅰ～Ⅳの時期区分（小島1967)、近年は酒井重洋氏の研究（酒井1976)、井口Ⅴ～Ⅷ期（井口村教委1980）及び丸山Ａ式の提唱等がある（上市町教委1881)。１～３勝木原式、八日市新保式、６～12御経塚式、13～30中屋式、37～39大洞C_1式並行、38は大洞C_2～Ａ式にそれぞれ比定される。

３．その他の遺物

有孔球形(状)土製品（図版16―１～７）

総数７点出土している。当遺物の研究史的動向および分類作業は小島俊彰氏によりすでに公表ずみである。（小島1980）分類は小島氏論文に従う。

１、無文紡錘形　１～４　60g、54g、62g、54g

２、有文紡錘形　５　29g

３．算盤球形　６　26g

４、下ぶくれ形（稜を持つ）　７　44g

定形品は１点もなく、すべて½以下の大きさであり、形態は復元推定である。（孔を中心として図を復元）尚、小島氏報告によれば早月上野遺跡より25点、東尾崎遺跡３点、石垣遺跡より27点出土している。用途に関しては、まだ見解の一致をみない遺物でもある。

耳飾（図版15―18）

径５cm位（推定）で幅は0.8cm、薄形で形も正円に近い環状の土製品である。作り方は精巧であり、表面はみがきがかけられ光沢がある（椎骨形)。類似なものは滑川市本江遺跡報告（図版179―9）にある。尚、耳飾りの多く出土した埼玉県高井東遺跡報告の分類でいくとＡ種６類になる。

土偶（図版16―８）

顔の部分がえぐられており、わずかに頬の部分に赤く塗られた痕跡が見い出される。類例は早月上野遺跡報告15図１にみられる。（酒井1976）

古銭

永楽通宝が１枚、寛永通宝が13枚、昭和アルミ貨１枚、計15枚検出されすべて表土層より出土している。

永楽通宝

明朝の永楽通宝を模したものであるが、基本銭と著しく変化したものがある。天正年間から元和ごろまでの期間（1588～1624）鋳造といわれている。

寛永通宝

収集界で「古寛永」と「新寛永」の二つに区分、明暦までを古寛永（官銭としては寛永13～20年)、寛文沈降（1688年）を新寛永と称している。古寛永が濶字なのに対して、新寛永は細字である。例外はあるが賽の字の足が古寛永ではスのようになっている（ス宝）のに対して新寛永では八になっている（八宝)。古寛永は３枚、新寛永は10枚ある。新寛永の内訳は３枚が鉄銭、背面に元の字があるもの（元文５年に鋳造が認可されたもので、作業は寛保元年〔1741年〕に開始され、やや小形のものが多く、製作のよいのが特徴である)、青海波文（11波）のものがある（明和５年〔1768年〕に登場した４文銭である)。

きせる（図版15―19)

吸い口であり銅板を丸めて円筒状に整形したもので、一条の合せ目が認められる。形状は羅宇につながる部分から直径が細くなっている。

土製玩具（どろめんこ）（図版15―14～16)

14は動物を模したもので、猿が子供を抱いていると思われる（素焼)。15は宗教関係の模した（塔？)素焼きで蓮台。16は磁器製で子供が正座している。

どろめんこの研究者金刺氏の分類によれば14は第３分類、15は第２分類に属する。尚、県内では柳田遺跡より出土している（富山県教委 1975)。

Ⅴ　ま　と　め

今回の調査では、時期のわかる遺構は縄文時代晩期後葉の土坑一基のみで、他の遺構は時期が不明である。晩期後葉の土坑は墓拡の可能性も考えられており、集落の縁辺部での土地利用の一端を示しているものと思われる。

出土遺物は縄文時代中期前葉から近世にまで及び、長期に亘って集落が営まれていたものと思われる。中でも弥生土器の発見は今回の調査が初めてであり、今まで早月上野遺跡で空白だった時期を埋めたことになる。出土した弥生土器は後期末のものであり（図版　15―13)、該期の遺跡の発見が増えている中で、立地の点など興味深い問題を孕んでいる。

圧倒的多数を占める縄文時代の遺物は、石器以外はほとんどが細片化しており、長い間にかなりの改変されていると思われる。

引　用・参考文献

安孫子昭二　1968　「東北地方における縄文後期後半の土器様式―所謂（コブ付土器）の編年―」『石器時代』第９号

石川県教育委員会　1976　『野々市町御経塚遺跡調査（第８次）概報』

石川県教育委員会　1977　『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』

市原寿文・大参義一　1965　「縄文文化の発展と地域性―東海―」『日本の考古学Ⅱ』

井口村教育委員会　1981　『富山県井口村井口遺跡発掘調査概要』

大沢野町教育委員会　1977　『富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要』

勝山市教育委員会　1977　『勝山市埋蔵文化財調査報告第１集鹿谷本郷遺跡』

金刺伸吾　1976　「どろめんこの話」『どるめん』第３号

上市町教育委員会　1981　『北陸自動車道遺跡調査報告―上市町遺構編―』

久々忠義　1973　「遺跡分布調査に参加して」『しんきろう』第４・５合併号

小島俊彰　1965　「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」『大境』第２号　富山考古学会

小島俊彰・出崎政子　1967　『勝木原遺跡Ⅰ』　富山県立高岡工芸高校地歴クラブ

小島俊彰　1972　「縄文中期」『富山県史考古編』

小島俊彰　1979　『滑川市史』「考古資料編」

小島俊彰　1980　「有孔球状土製品」『考古学研究』105号

酒井重洋　1976　「上市町眼目新丸山Ａ遺跡」　『大境』第６号　富山考古学会

神保孝造　1979　「竹林Ⅰ遺跡」『昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧』　富山県教育委員会

庄川町教育委員会　1975　『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』

高堀勝喜・久保清　1951　「河北郡宇ノ気町気屋遺跡」『石川考古学研究会々誌』第３号

高堀勝喜　1954　「金沢市古府遺跡調査報告」『石川考古学研究会々誌』第６号

高堀勝喜　1964　「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『石川県押野村史』

高堀勝喜　1965　「北陸」『日本の考古学Ⅱ』

立山町教育委員会　1975　『富山県立山町金剛新遺跡緊急発掘調査概報』

出崎政子　1969　「北陸地方の縄文時代晩期について(1)」『大境』　第３号　富山考古学会

動坂遺跡調査会　1978　『動坂遺跡』

富山県教育委員会　1974　『富山県小杉町水上谷遺跡緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会　1974　『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書―富山市・朝日町間』

富山県教育委員会　1975　『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』

富山県教育委員会　1976　『富山県立山町岩峅野遺跡緊急発掘調査概要』

富山県教育委員会　1976　『富山県魚津市早月上野遺跡第２次緊急発掘調査概報』

富山県教育委員会　1977　『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』

富山市教育委員会　1973　『富山市杉谷（67、81、64）遺跡』

富山市教育委員会　1976　『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』

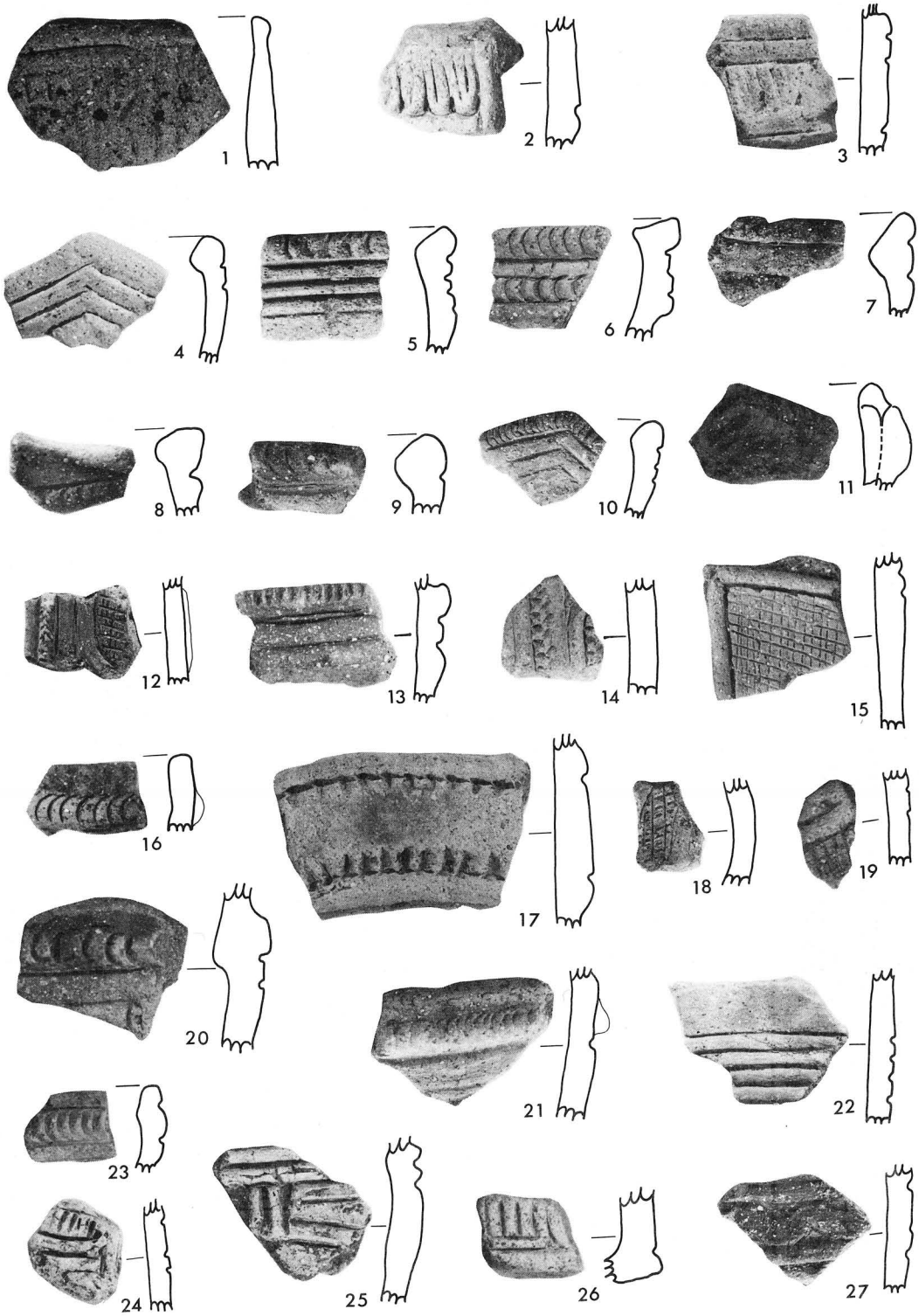
沼田啓太郎　1956　「旧石川郡安原村中屋遺跡」『石川県考古学会会誌』　第８号　石川県考古学研究会

湊　晨・広田寿三郎・大谷清瑞　1959　『天神山遺跡調査報告書』　富山県・魚津市教育委員会

湊　晨　1972　「縄文後・晩期」『富山県史考古編』所収

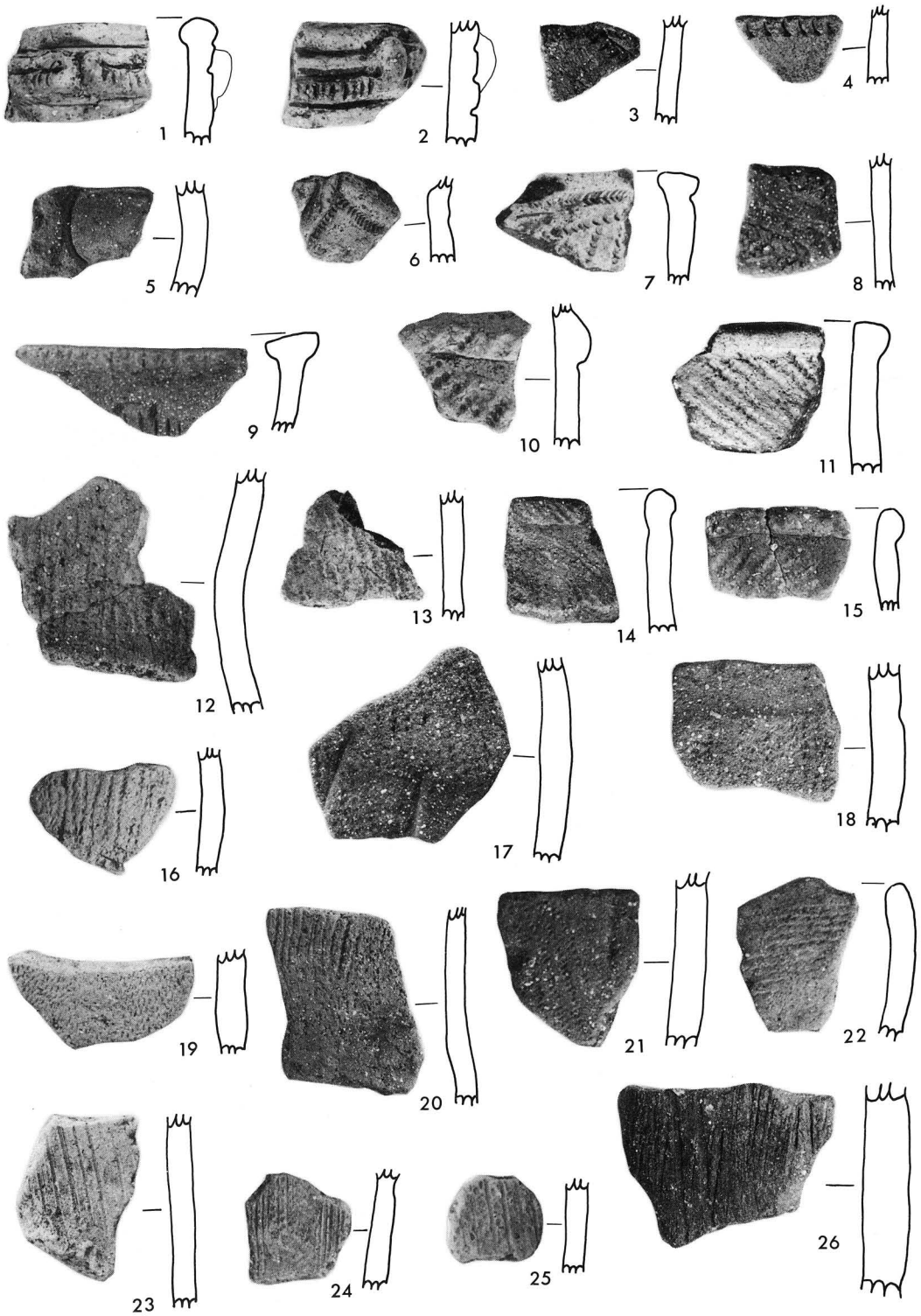
吉岡康暢　1971　「石川県下野遺跡の研究」『考古学雑誌』　第56巻第４号

渡辺　誠　1973　『縄文時代の漁業』

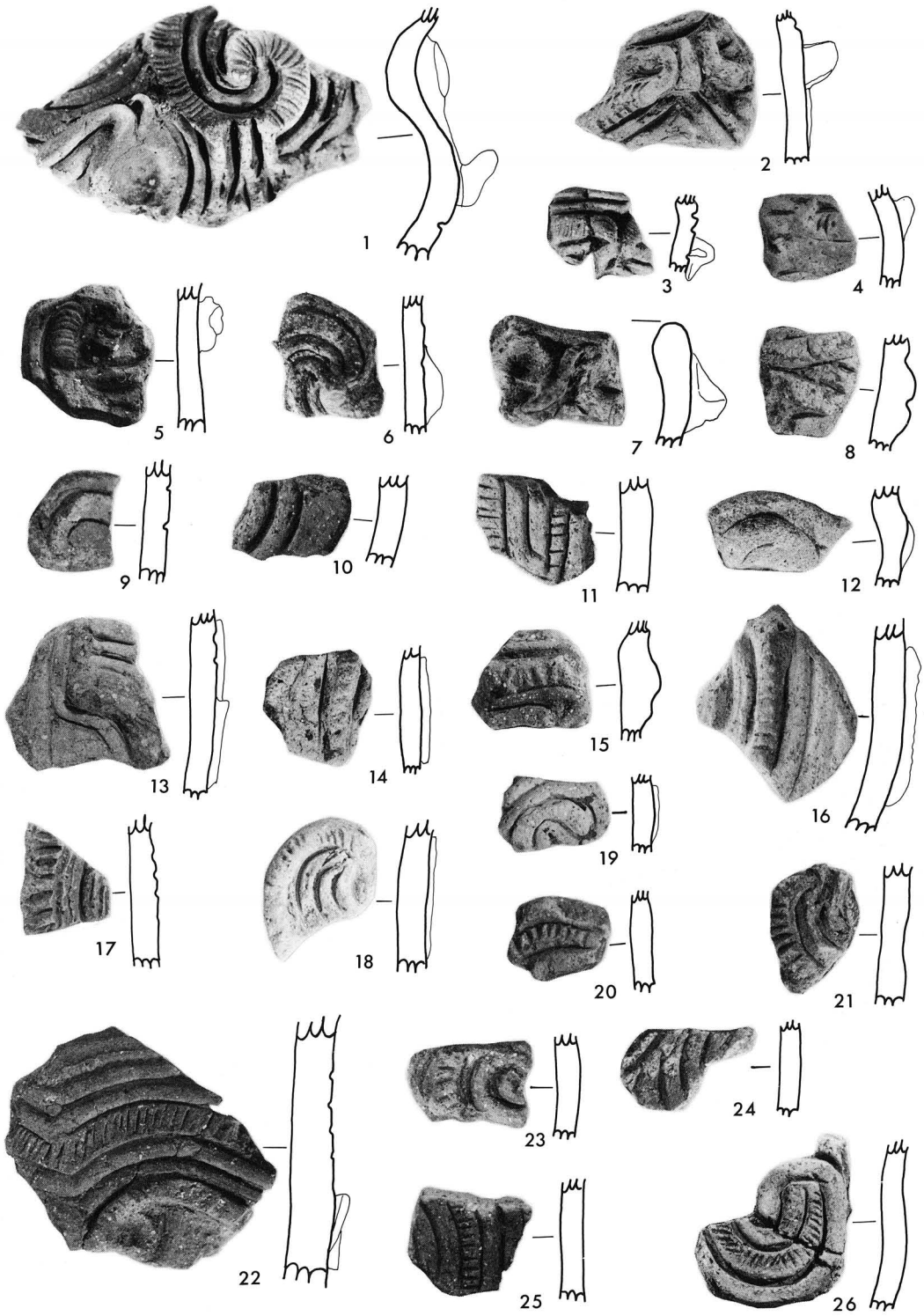


(½)

第図 2

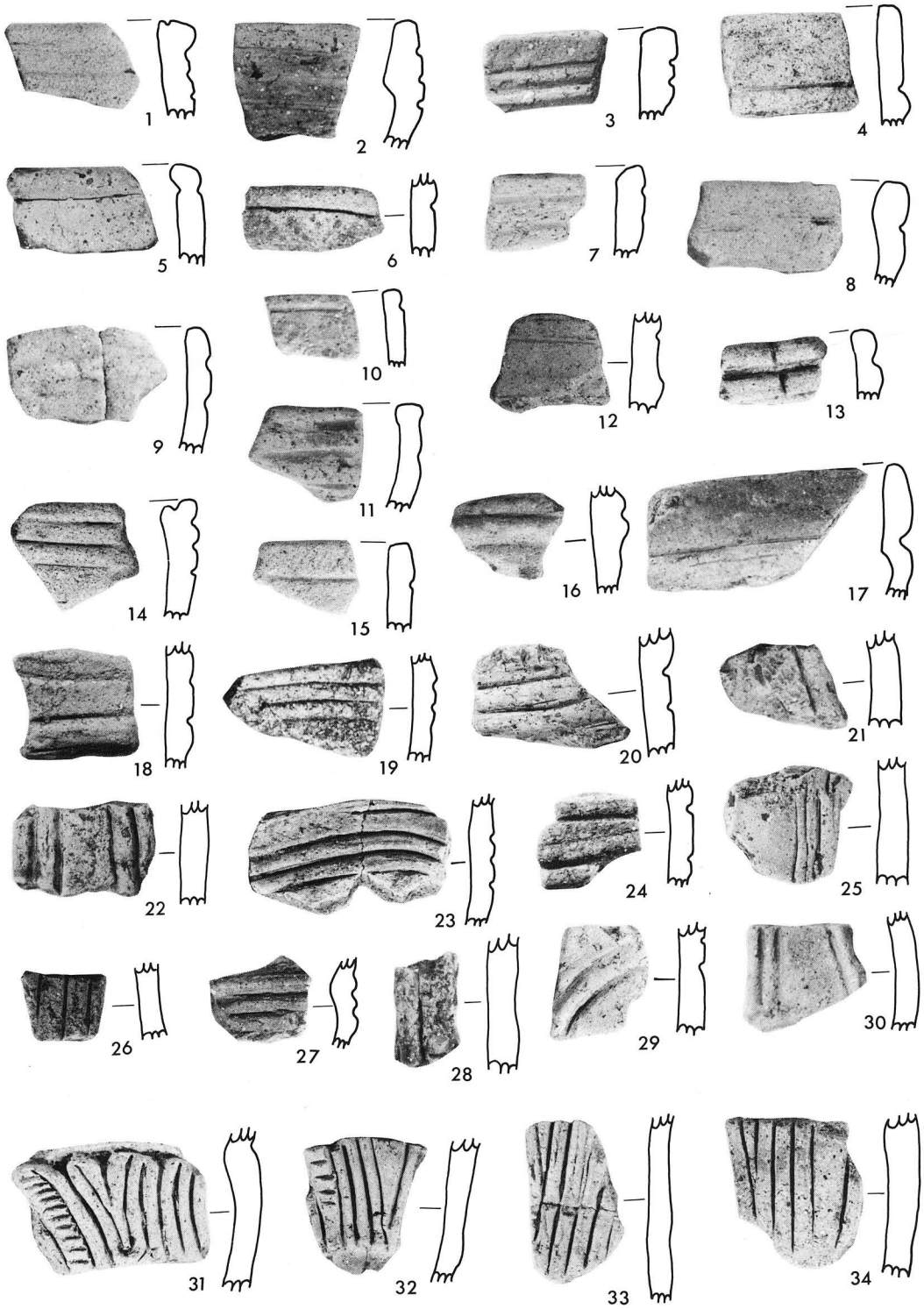


(½)

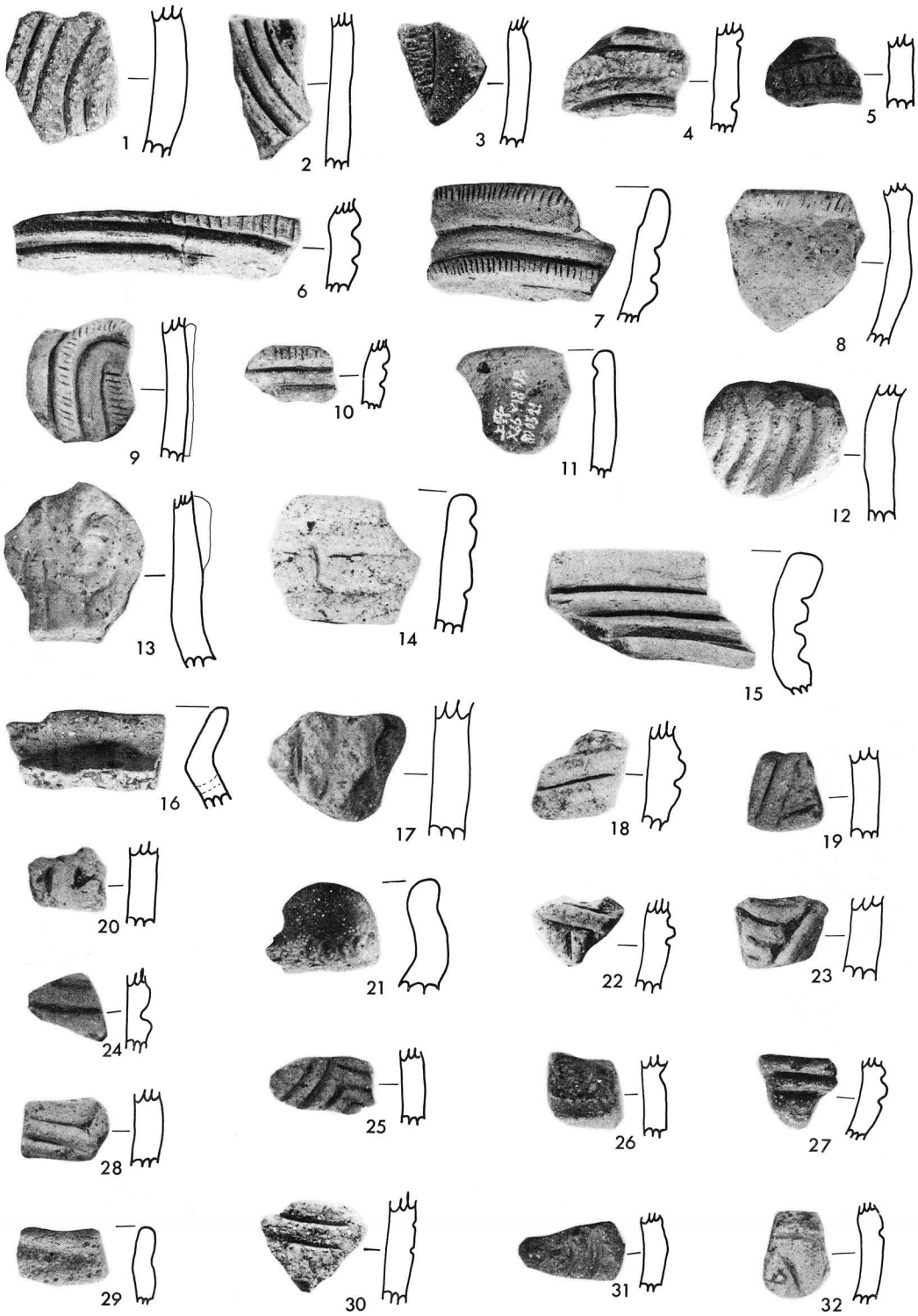


(½)

図版 4

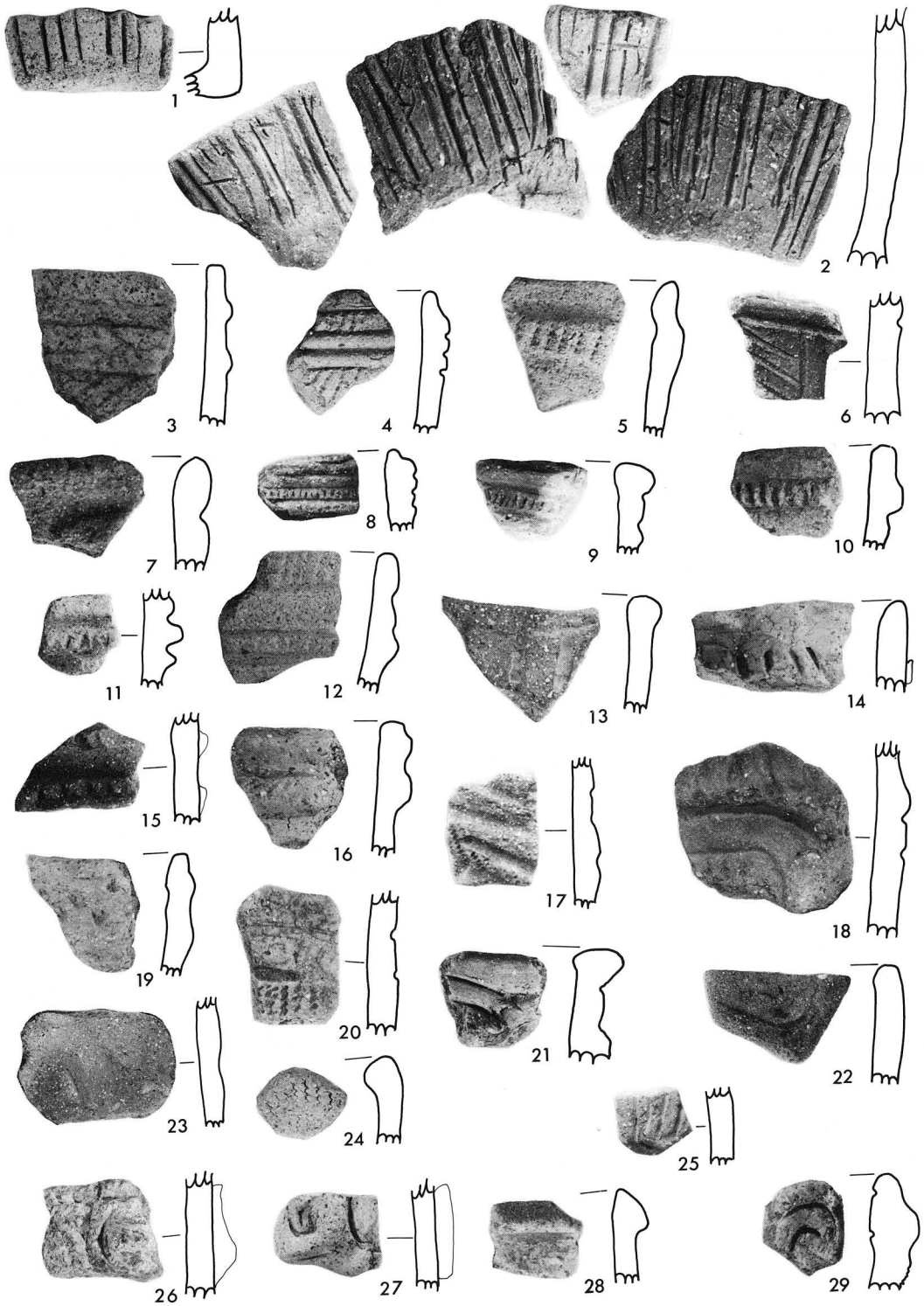

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

(½)

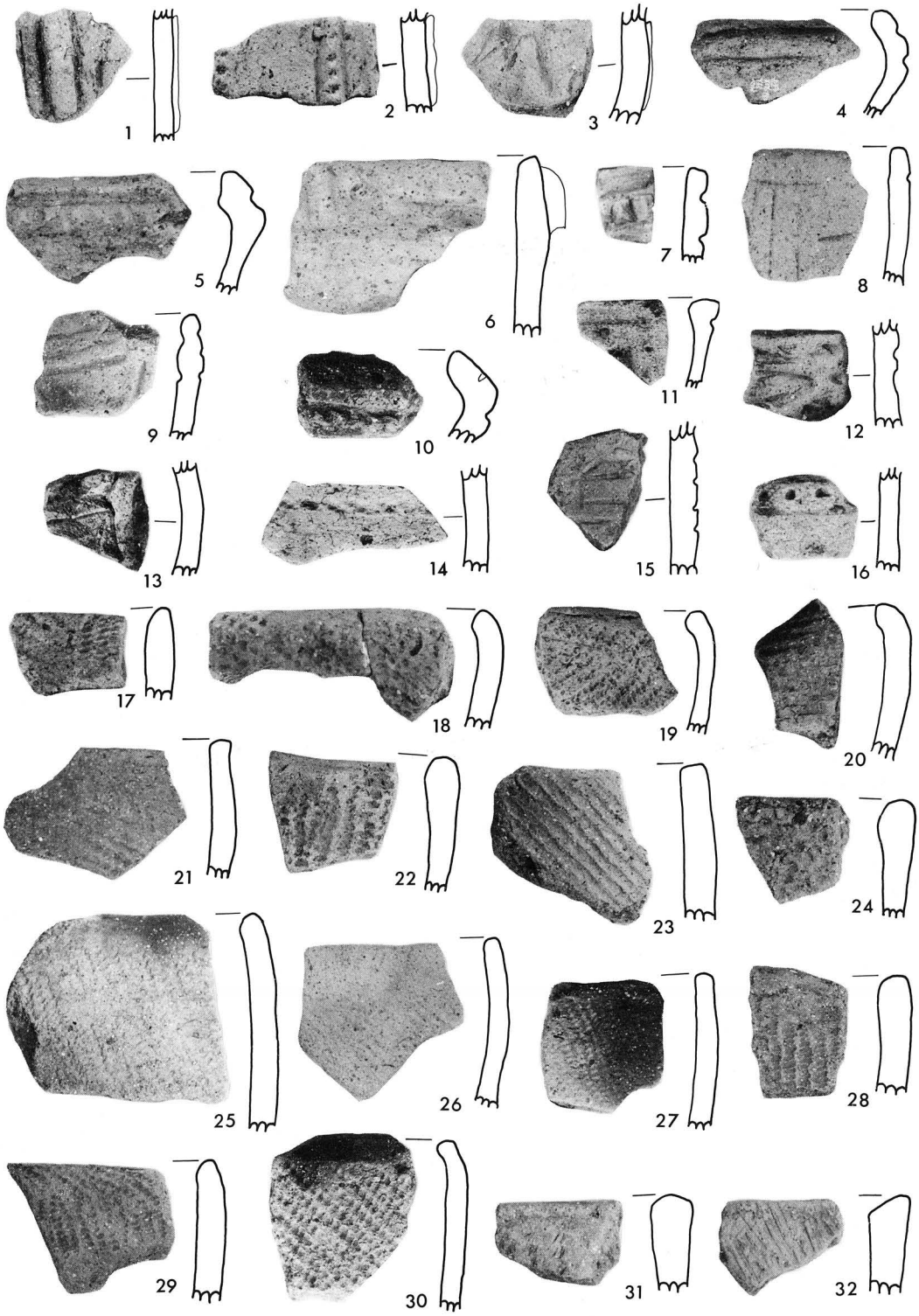

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

(½)

図版 6

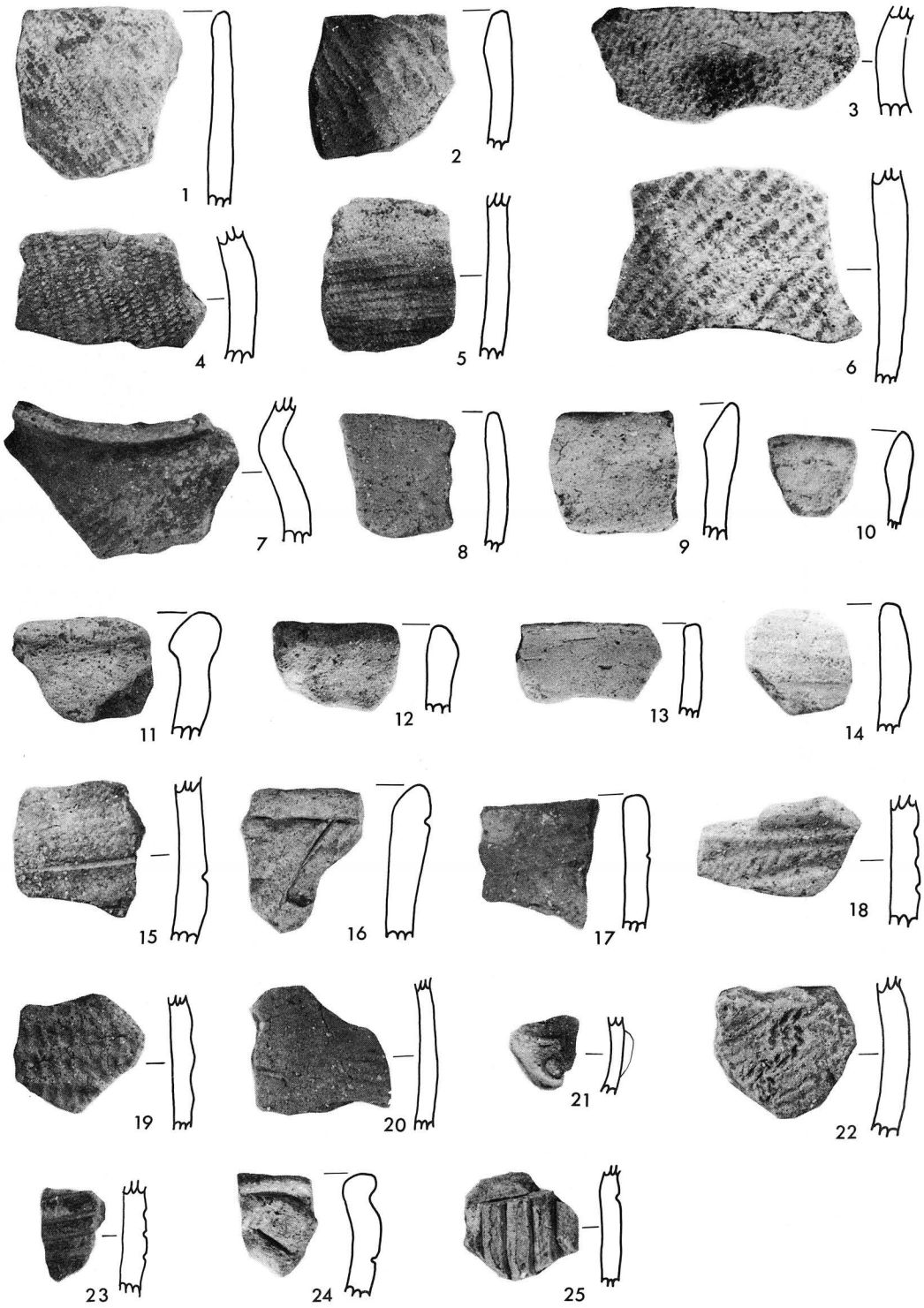


(1/2)

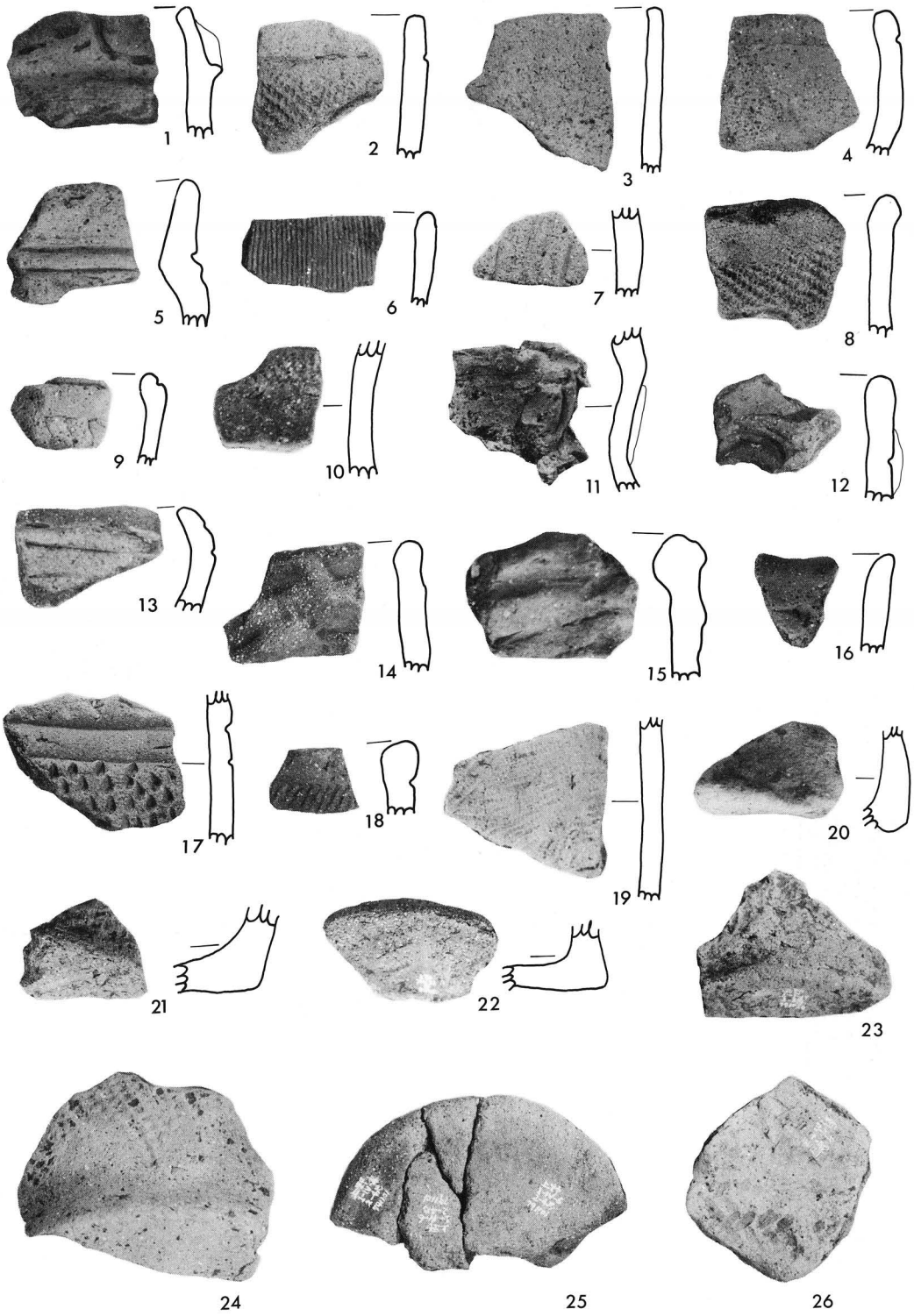

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32

(½)

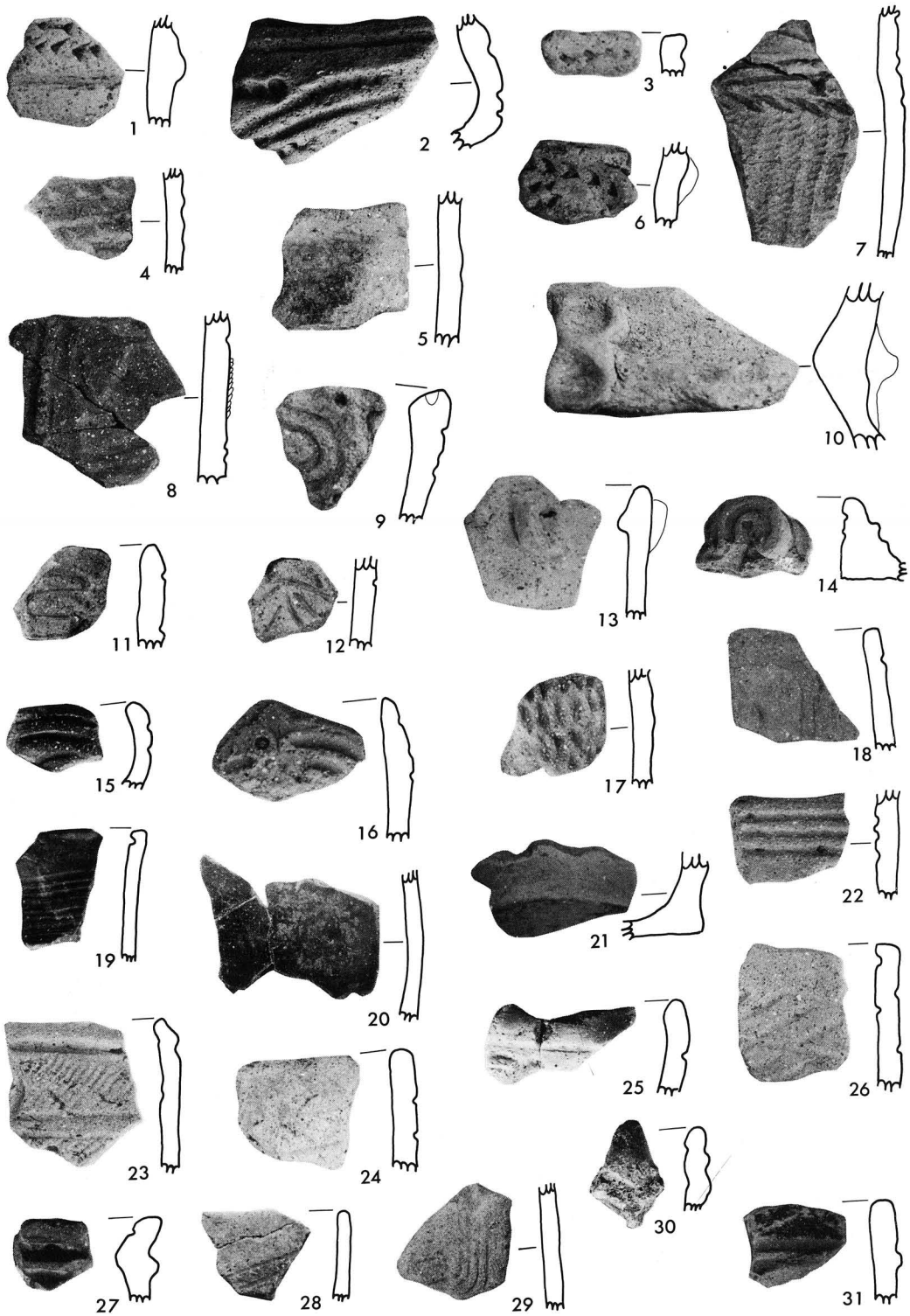
図版8



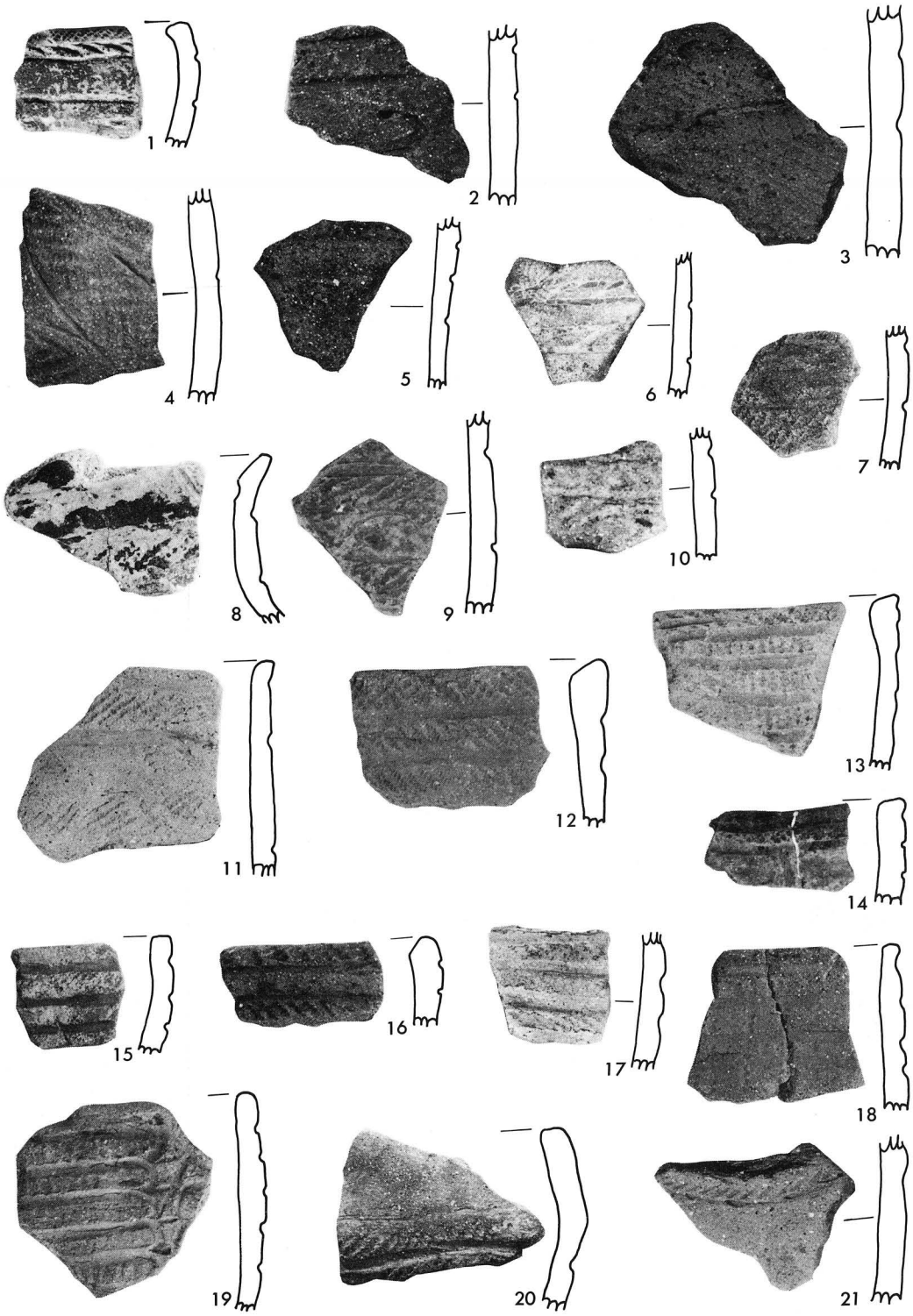
(½)



(1/2)

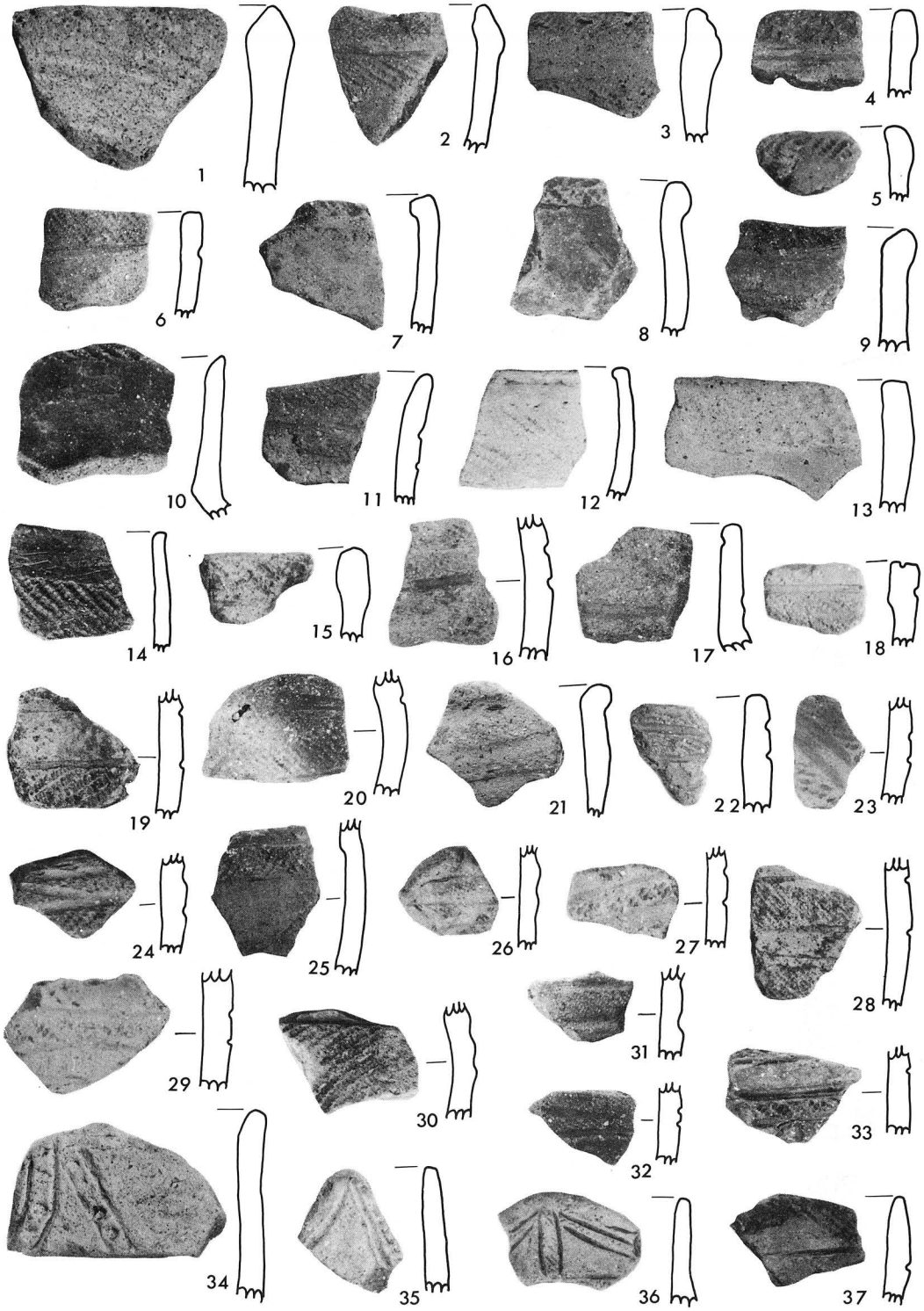

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

(½)

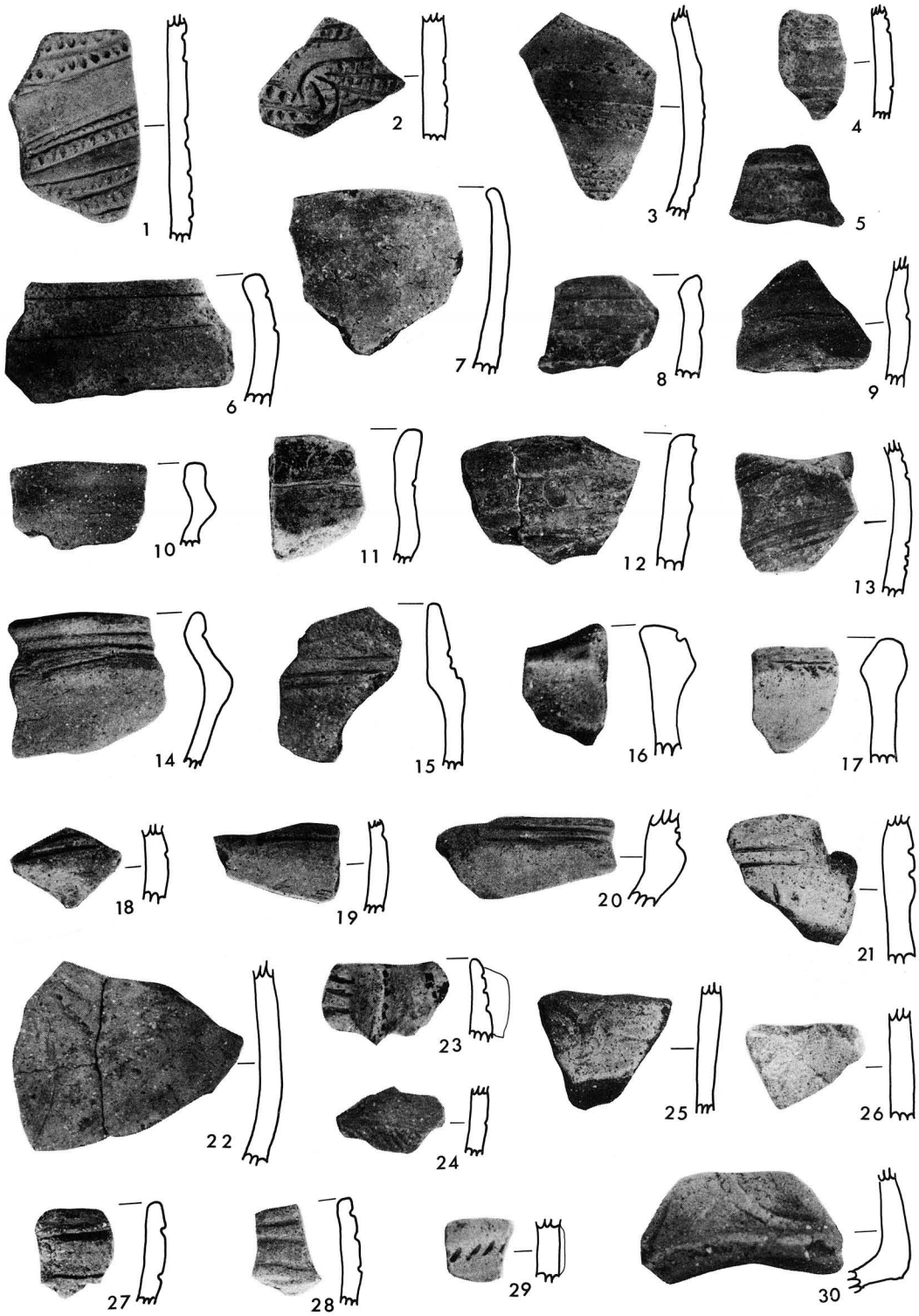


(½)

図版12

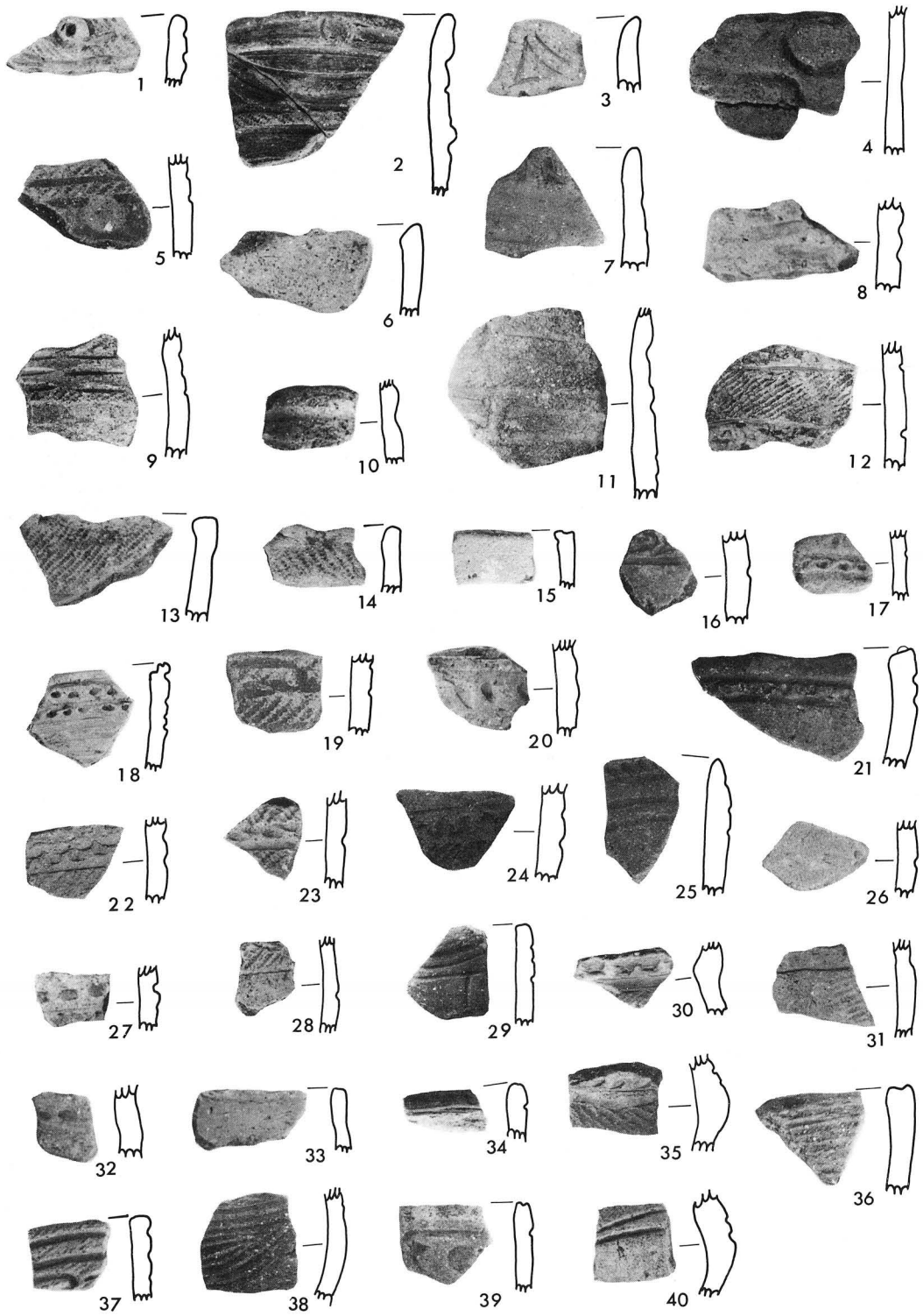

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37

(½)

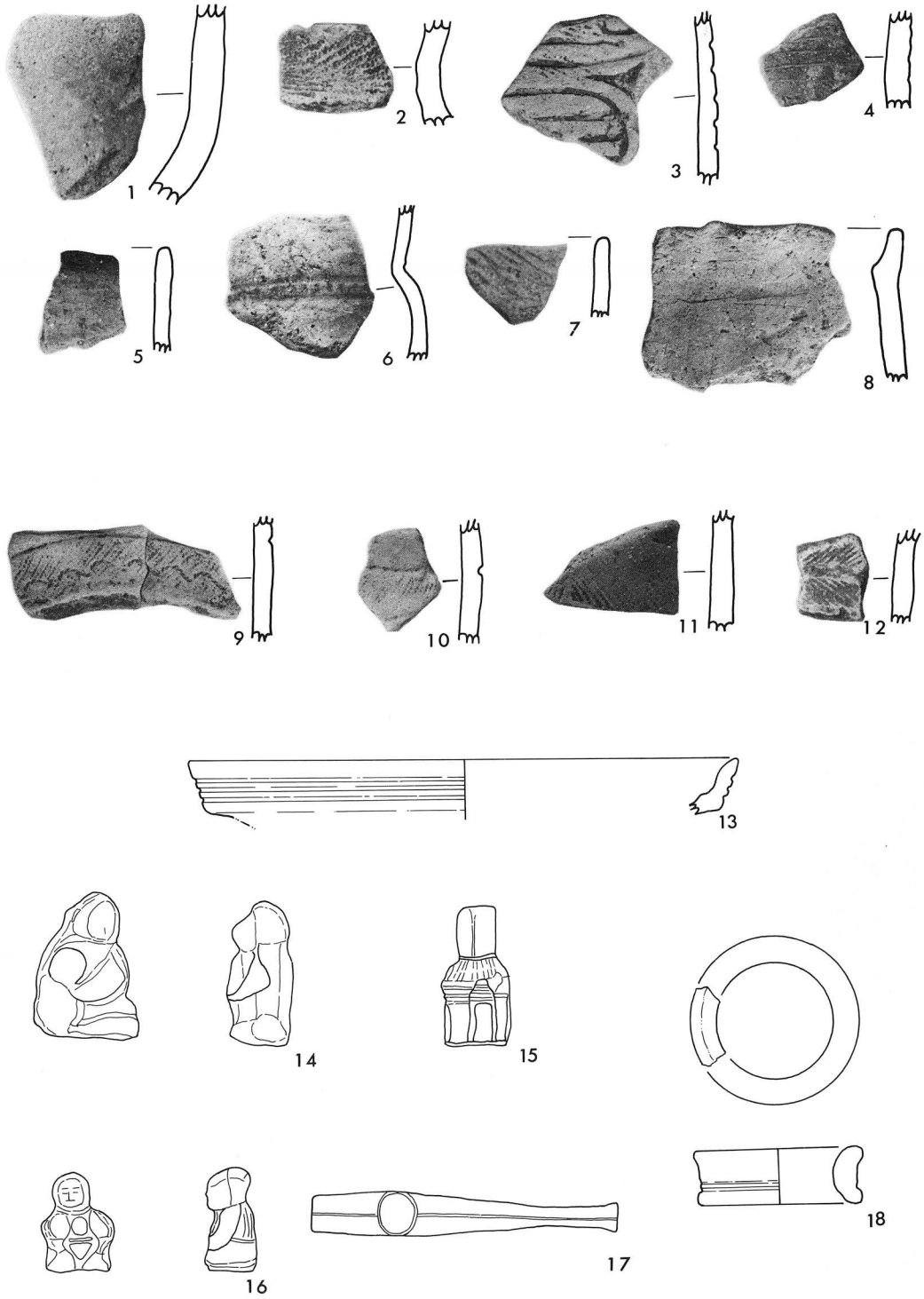

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

(½)

図版14

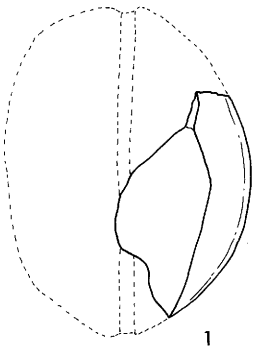

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

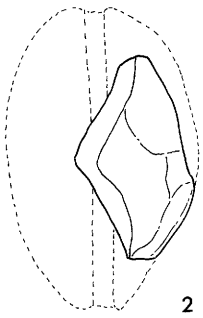
(1/2)

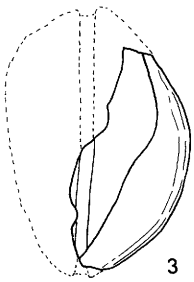


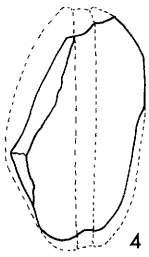
(1/2)

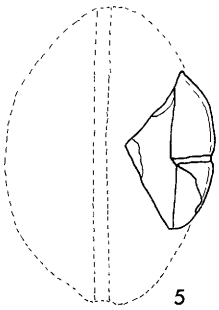
図版16

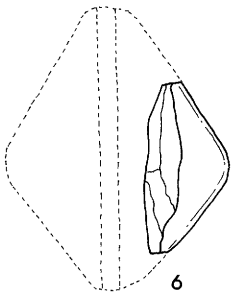


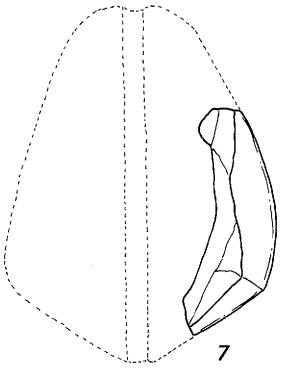


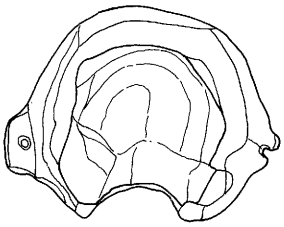


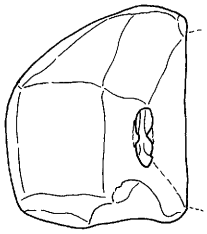


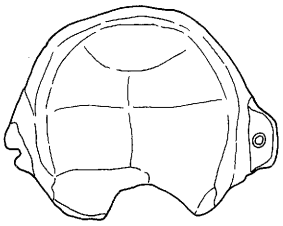


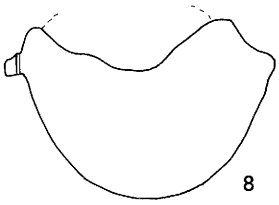




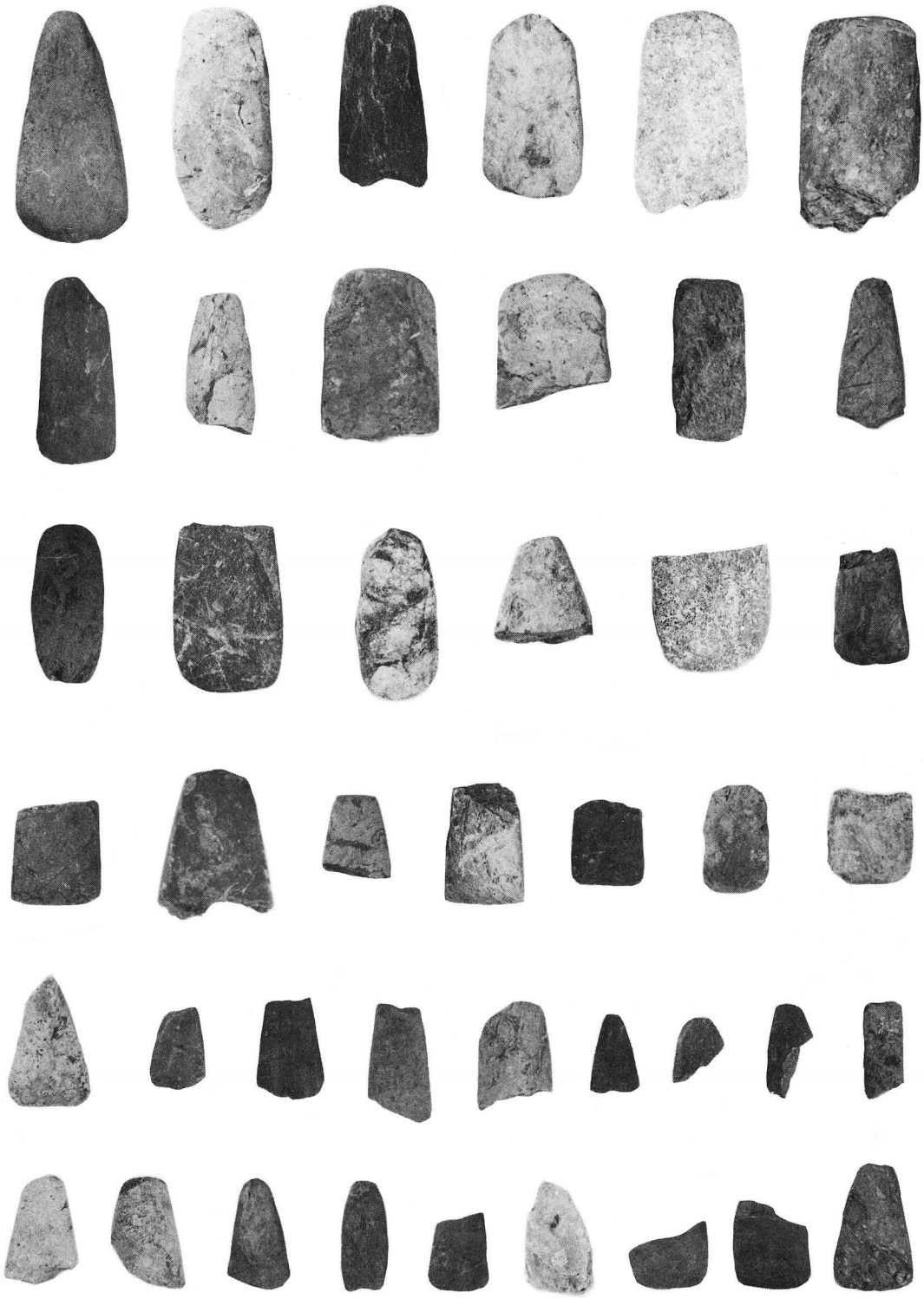




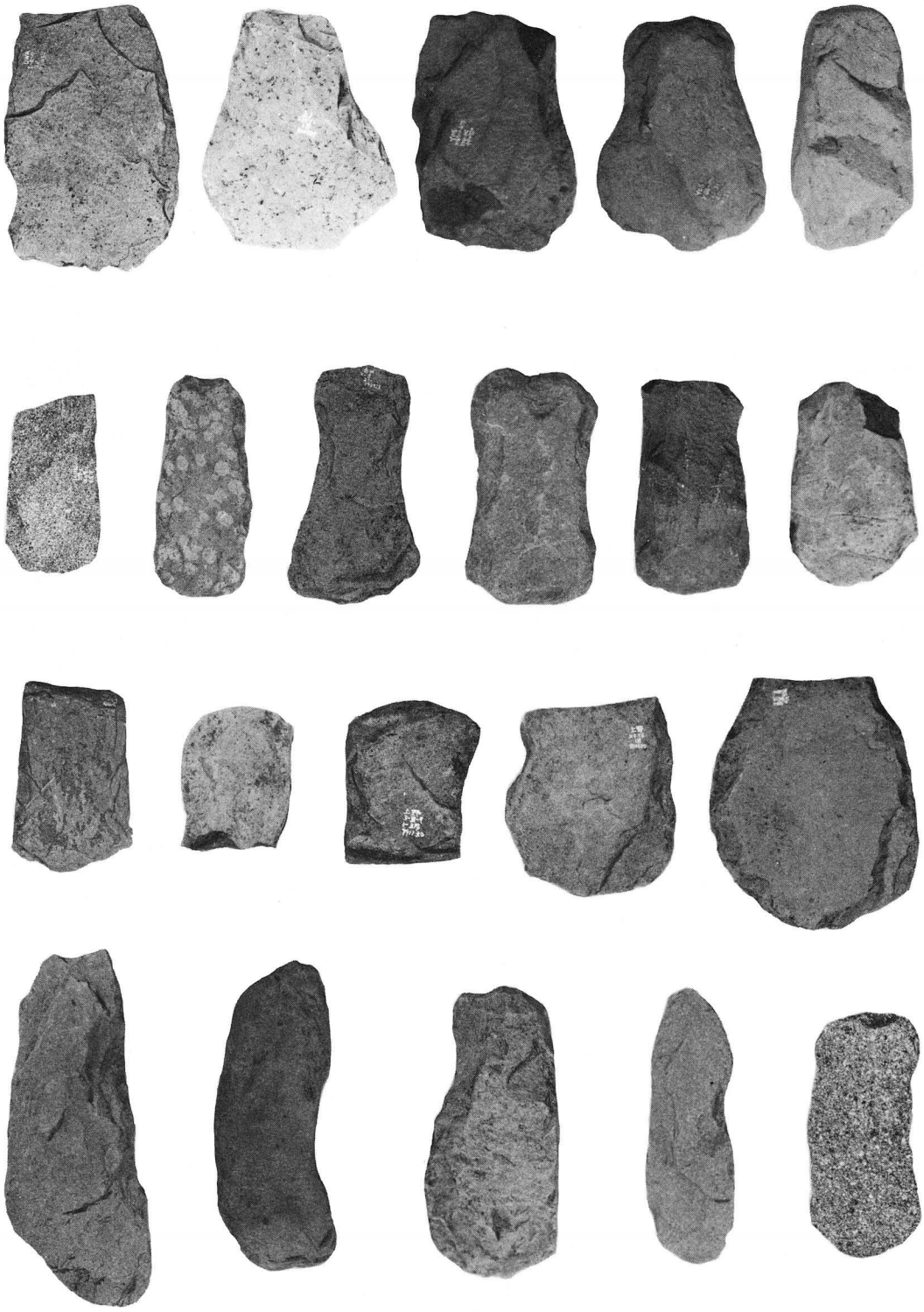




(½)

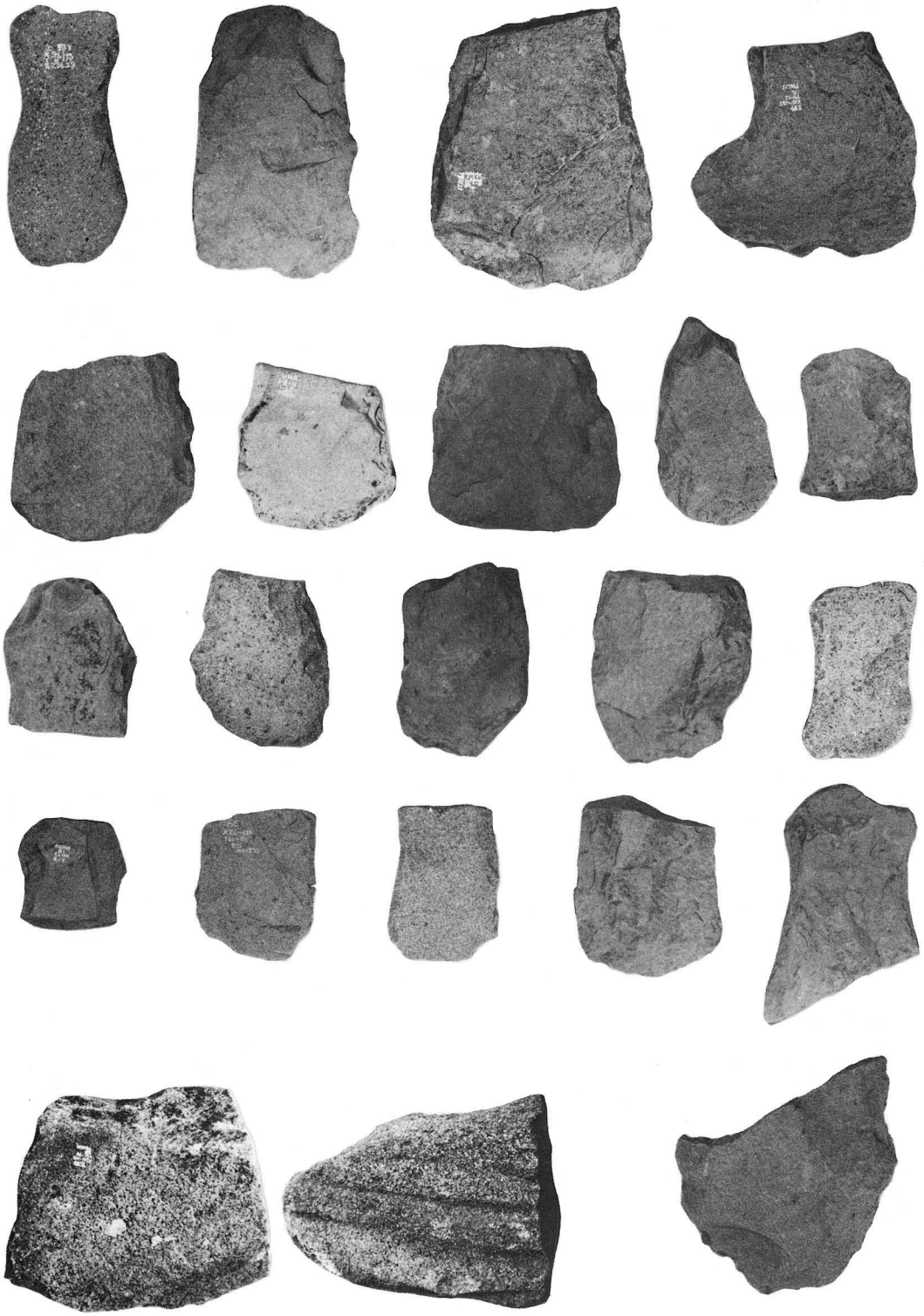


磨製石斧



打製石斧

打製石斧

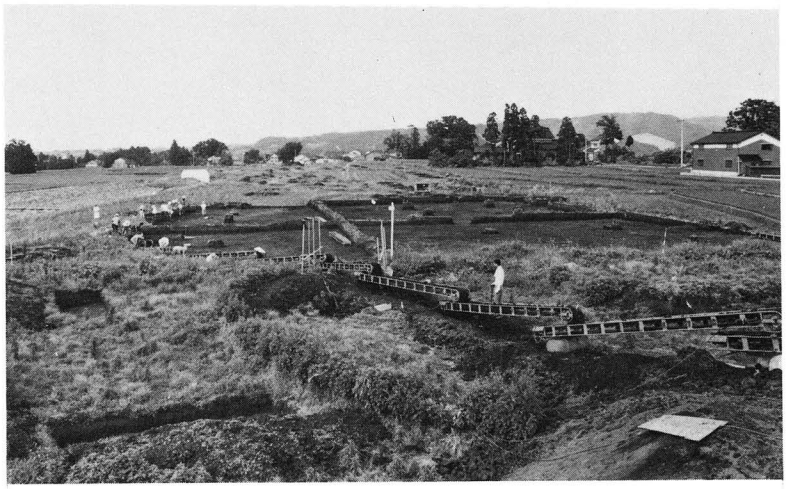


打製石斧・玉砥石

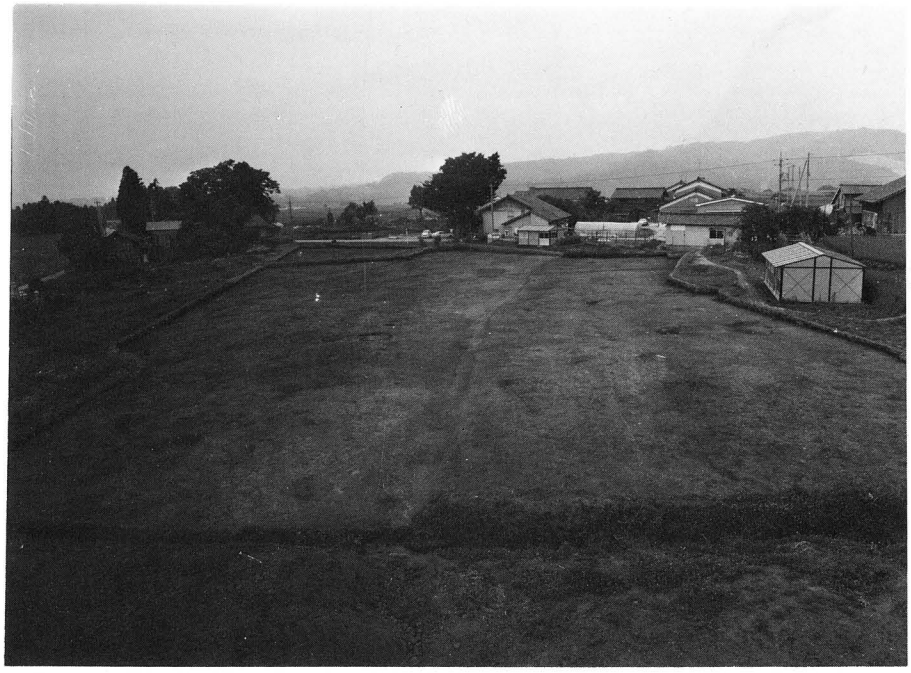
石棒・石剣・石刀，石錘，玉類，叩石

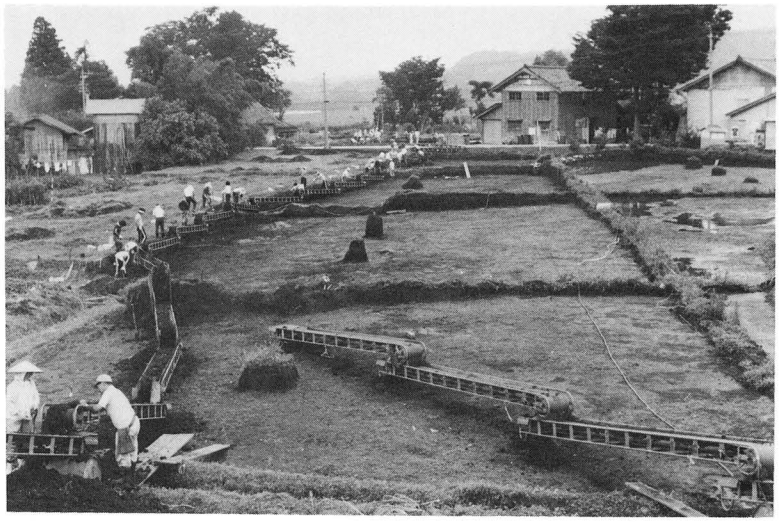
試掘状況

試掘　A地区全景

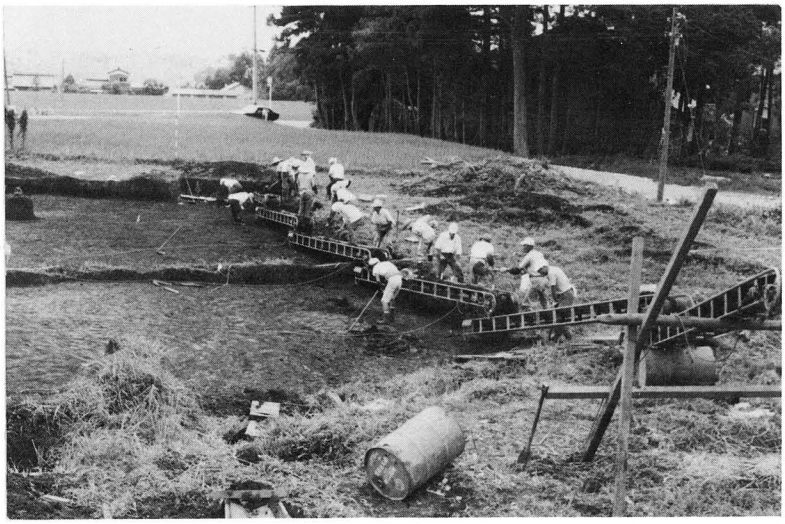


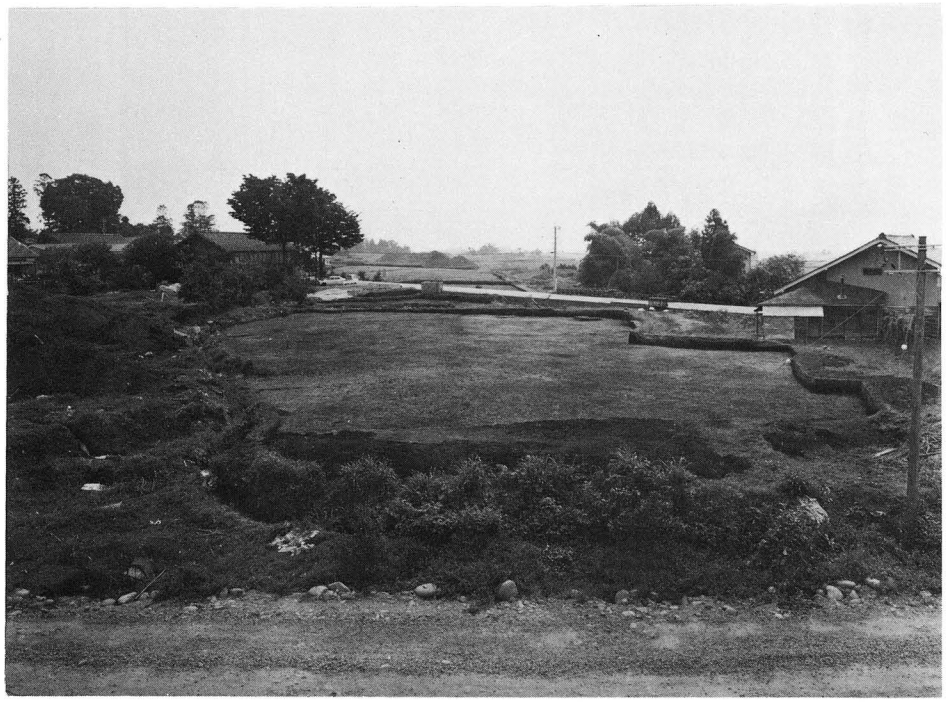
A地区





B地区

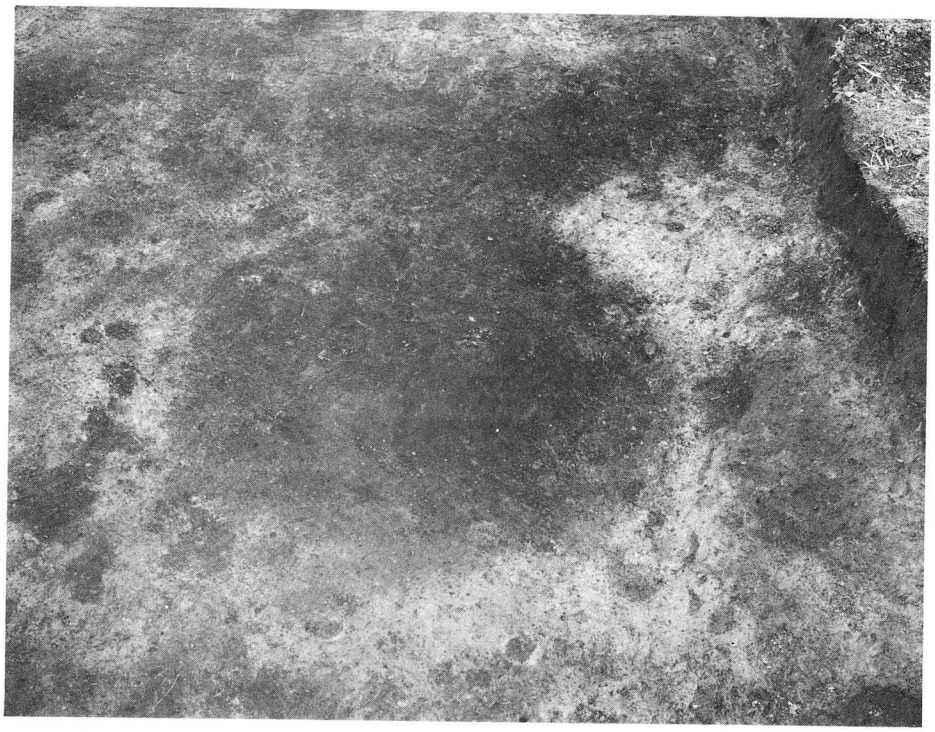




C地区

深掘区

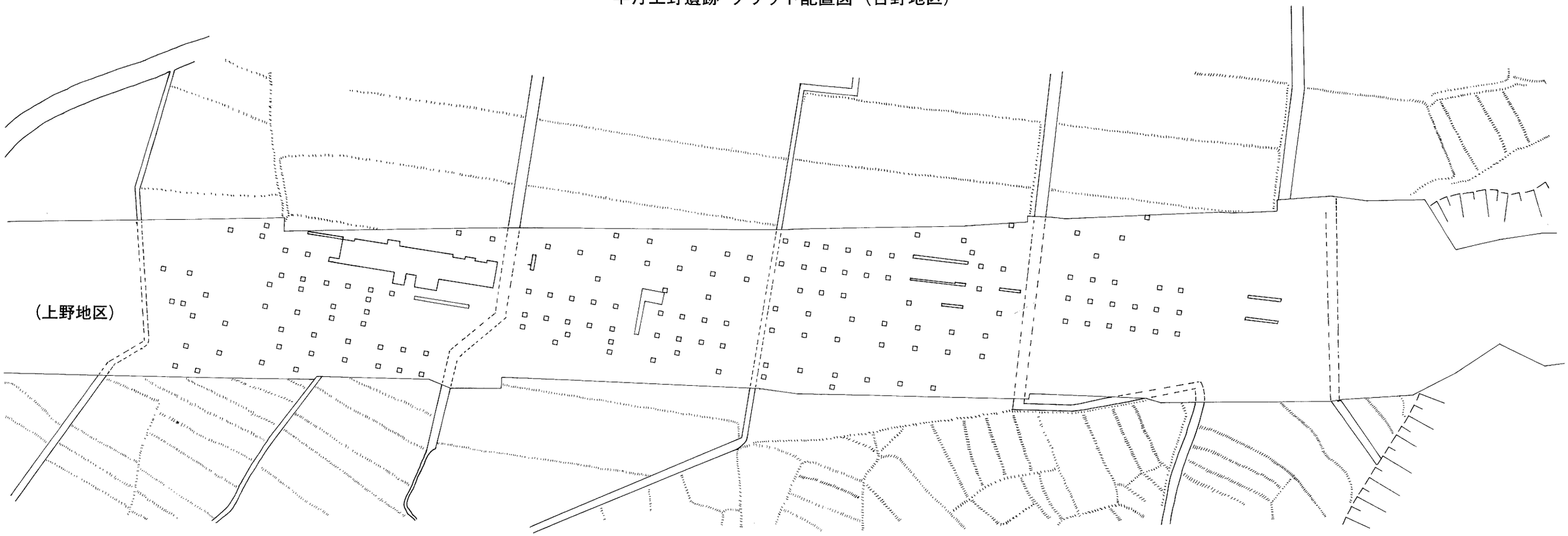
SK 01



SK 01

魚津市埋蔵文化財調査報告書第９集
富山県魚津市
早 月 上 野 遺 跡
（北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ）
昭和57年３月31日　発行
発行　魚 津 市 教 育 委 員 会
〒937 魚津市釈迦堂1-10-1
印刷　㈲　日　本　海　印　刷

早月上野遺跡 グリット配置図（吉野地区）

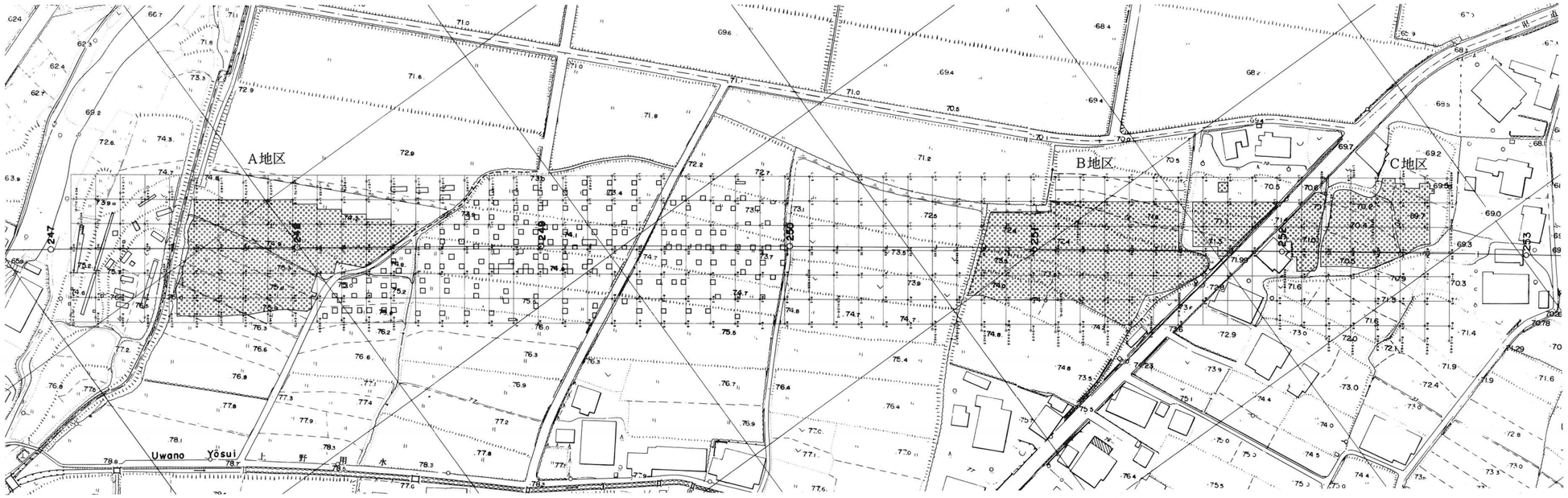


早月上野遺跡 グリット配置図 （上野地区）

S＝1/2,000

□ ―― 試掘区

▒ ―― 拡張区



（吉野地区）